

考 古 編



## I 縄文時代

## 1 宮内出土の異形局部磨製石器

出土地 出石町宮内字岡田、出石神社の東南の丘陵に位置する。1984年(昭和59)の春、宮内在住の福島富喜男氏が水路の泥をあげたところ、泥の中からこの異形局部磨製石器が採集されたものである(図1)。

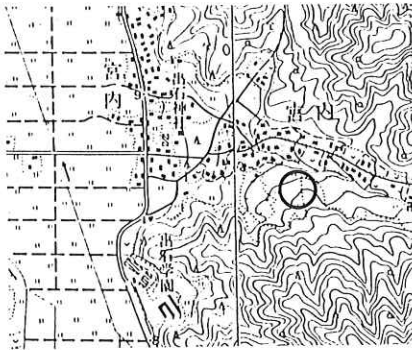


図1 位置図

(4点)、養父郡八鹿町八木遺跡(1点)から見つかっている。製作時期は他の出土例が縄文時代早期の押形文土器と伴出することが多く、この遺物も縄文時代早期に属するものであろう。遺物は福島富喜男氏が保管されている。

遺物

異形局部磨製石器(図2、写真1)

俗称トロトロという名で呼ばれるチャート製の異形局部磨製石器である。無茎の石鏃<sup>むけい</sup>に似ているが<sup>せきぞく</sup>両側縁が脚部の上で少しくびれる形である。石器は押圧<sup>はくり</sup>剥離により調整している。長さ2.7cm、最大幅1.8cm、重さ2gをはかる。類例として城崎郡日高町神鍋遺跡

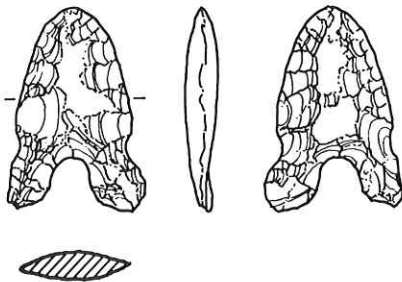


図2 異形局部磨製石器(山口卓也氏図)

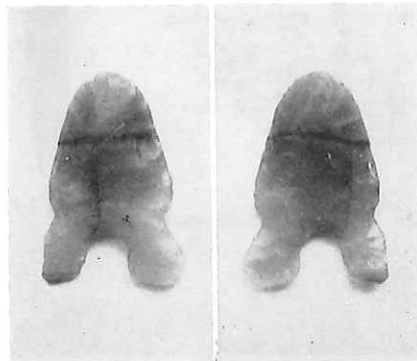


写真1 異形局部磨製石器

## 2 宮内出土の縄文土器

所在地 出石町宮内字三井町の坪、田の中より、宮内在住の水島守造氏が1975年（昭和50）頃、耕作中に偏平片刃石斧（せきふ図132-1）と共に採集されたもの

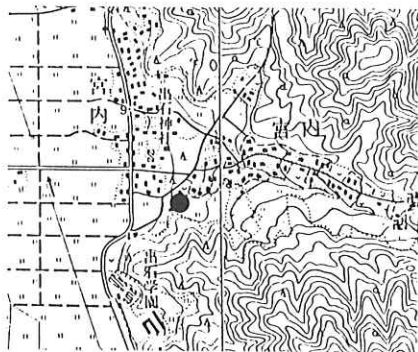


図3 位置図

である（図3）。

遺物

深鉢形土器（図4、写真2）

口縁部の破片で、L字状に描く沈線と器面に施文した縄文様を部分的に消して、装飾化する磨消縄文を残している。

胎土は砂粒を含むもので、焼成は良い。色調は褐色を呈する。

残存する長さ5.4cm、幅5.4cm

をはかる。

製作年代は、岡山県玉島市中津貝塚を指標とする縄文時代後期中津式に該当する。

遺物は、出石町教育委員会に保管されている。

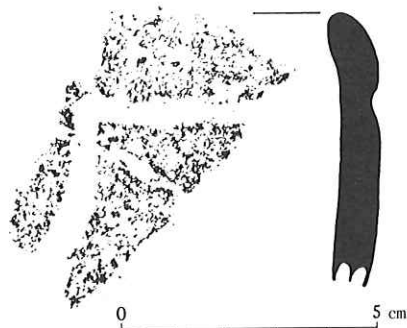


図4 深鉢形土器（拓影）

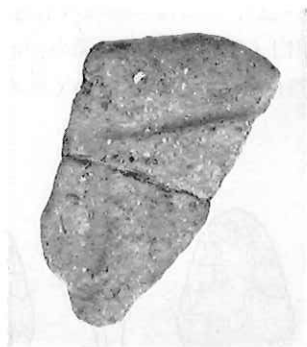


写真2 深鉢形土器

## II 弥生時代

## 3 宮内・黒田遺跡

宮内・黒田遺跡は、出石町宮内、出石神社の参道から南西へ約60mの田の中に位置する。出石神社を中心とする微高地の末端にある(図5・127)。

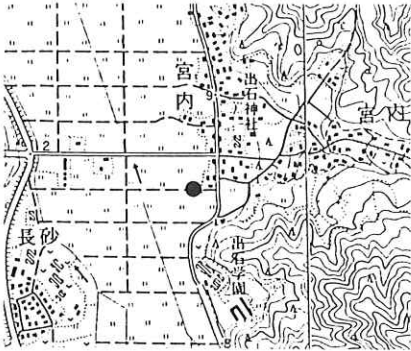


図5 位置図

掘削されていた。この排水溝は幸いにも比較的<sup>わきみず</sup>湧水も少なく、溝内の底面の地山まで調査することができた。層序は図6に見られるとおりで、地表から約90cmで地山に到達する部分も見られる。床土<sup>たんぼ</sup>以下の堆積のほとんどが砂層や砂礫層であるところから、東方からの<sup>はんらんたいせき</sup>氾濫堆積を思わせるものが認められた。この溝の北側部分では図6のように黄褐色砂質の地山面に須恵器、弥生土器、加工木、自然木がほぼ同一レベルで混在する状況であったが、遺構は何等確認できなかった。

また、この排水溝の底部、西半部はエンボで地山が深く掘削されており、かなり<sup>かく</sup>攪乱をうけていることが言える。

なお、この地点から溝を南へ約8mのところでは、断面において、地山に20cm程の浅い落ち込みがあり、その部分は、黒色腐食土が堆積しており、状況からして、人口的な溝のように考えられるが今後の問題としておきたい。

## B地点

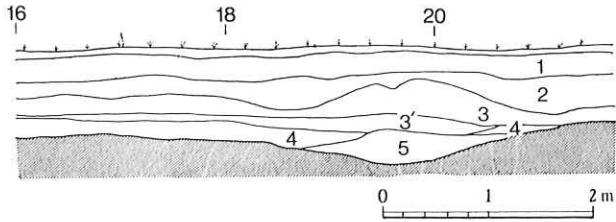
A地点より、南西へ約60mの地点で、そこから西へ約90mのびる排水溝で

1972年(昭和47)11月、農業基盤整備事業に伴う排水用の溝掘削中に発見された遺跡である。調査は翌年の2月から出石町教育委員会が調査主体となって遺物の集中する排水溝のA・B・Cの地点を中心にして行われた。

## A地点

出石神社の参道から、南西へ約60mの田圃で南北方向の排水溝が

3 宮内・黒田遺跡



1. 床土                    2. 褐色砂層                    3. 黒褐色砂礫層                    3': 黒褐色砂層  
4. 黒色砂礫層                    5. 黒色腐触土                    地山, 黄褐色砂質土

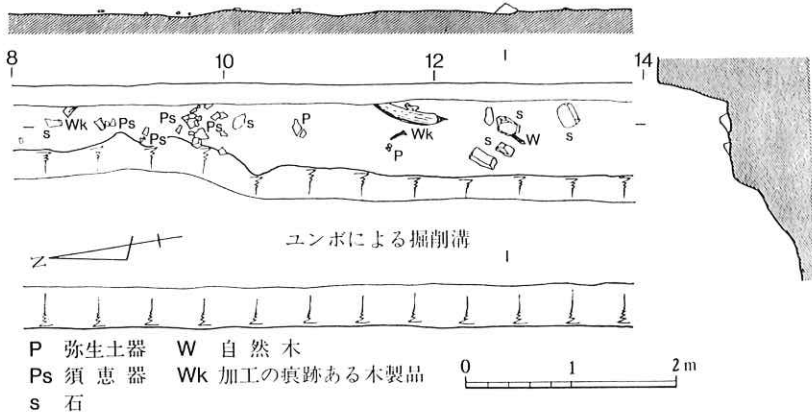


図6 A溝内北地区断面図

ある。この溝は湧水も激しく、水深がかなりあって断面観察もできない状態で層序も不明と言わねばならないが、溝から掘り出された黒褐色砂層中には弥生土器で、畿内第I様式の破片が含まれていたし、褐色砂層には、弥生土器片や須恵器片が混在した状態であった。

C地点

A地点より北西へ約160mの地点である。そこから約90m余の南東から北西方向の排水溝で、この溝も水深がかなりあり、絶えず東方からの水が流入しており、十分な断面観察とはいえなかったが、弥生土器の第I様式の土器片が出土している場所は、排水溝の中ほどで、床土の下に褐色砂層、暗褐色砂層と続き、そして、地表から約1.1mで第I様式が出土する黒褐色砂礫層

とつづくのである。

### 遺物

得られた遺物のほとんどが、排水溝の揚げ土の中から採集したものであるが、そのなかでも特に顕著なものだけを選び、簡単に記す。土器では、弥生土器・土師器があるが、とくに弥生土器の第Ⅰ様式の出土する地点は、BとCの地点のみである。

図7の1～4は、弥生土器、畿内第Ⅰ様式の中段階に属するものと考えられる。2は三条の刻み目突帯文の下部に貝殻の腹縁による綾杉文の一部が認められる。3は多条沈線のあいだに管束状の列点を刺突するもの。4は三条の沈線の下部に三角形列点文を配したものである。5～12は沈線や刻み目突帯の多条化傾向がみられる第Ⅰ様式の新段階の要素をもつものである。13は頸部に刻み目突帯をもつ第Ⅳ様式の壺形土器の破片。14は第Ⅴ様式の壺の口縁部であり、15・16は肩部に爪形の圧痕をもつ土師器である。

石器では、サスカイト製の石鏃2点、硬砂岩質の柱状石斧破片1点(図7-17)を採集した。

木製品では、A溝内北地区において、自然木と一部分に加工の痕跡をとどめるものが出土したが、用途等は不明である。

西谷英昭 前田豊邦「出石町宮内遺跡調査概報」『兵庫県埋蔵文化財集報』第4集  
1979年より転載

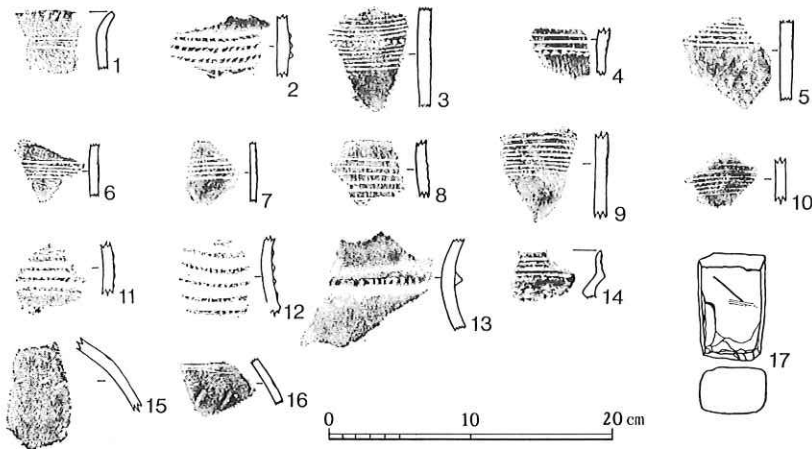


図7 出土遺物

#### 4 宮内遺跡

出石町宮内字三井町の坪・寺鏡他に位置する。出石神社の前面にひろがる、丘陵に立地する（図8、写真3）。

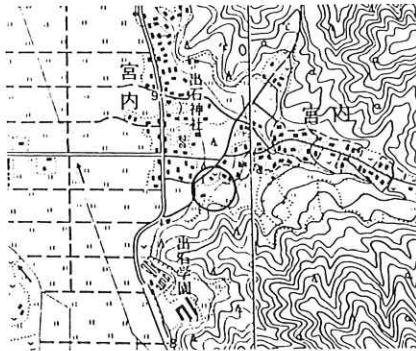


図8 位置図

1979年（昭和54）12月より翌年1月にかけて、出石町教育委員会が事業主体となり、宮内・総持寺町道バイパスの建設に先立ち計画路線内に遺跡の存在有無を確認する調査を行った。その調査の結果については、池田正男・森内秀造『出石・宮内遺跡——宮内字三井町の坪・寺鏡——』出石町教育委員会1984年に報告書としてまとめ

られている。詳細については、報告書を参照されたい。ここでは遺構を確認した第1トレンチから第6・30トレンチをとりあげ転載に近い形でまとめた。

試掘用のトレンチは、出石神社の鳥居の前に、第1～6トレンチ、谷の中央部に第7～10トレンチ、田の中に第11～13グリッド、丘陵上に第14～33までのトレンチとグリッドを設定した（図9、写真3）。

##### 第1トレンチ 調査（図9）

出石神社の鳥居の前に位置する。地目は田である。調査区は2×13mをはかる。

調査の結果、深さ1m未滿の所に第2・4・6トレンチと同様の枝状に旧河道が流れていることが判明した。

土層の堆積は、基本的には①～④層までと、⑤～⑩層とに大きく分かれる。前者は川が埋没したのち自然堆積したものであり、後者は川が流れ、⑦黒色粘質土層中に⑨砂利層がレンズ状に堆積し、自然に埋没した過程を示す。

遺物は上から③黄灰色粘質土層、④灰色粘質土層内から中世陶磁器、須恵器が出土している。⑧黒灰色砂層、⑨砂利層、⑩砂層などの旧河道内の土層



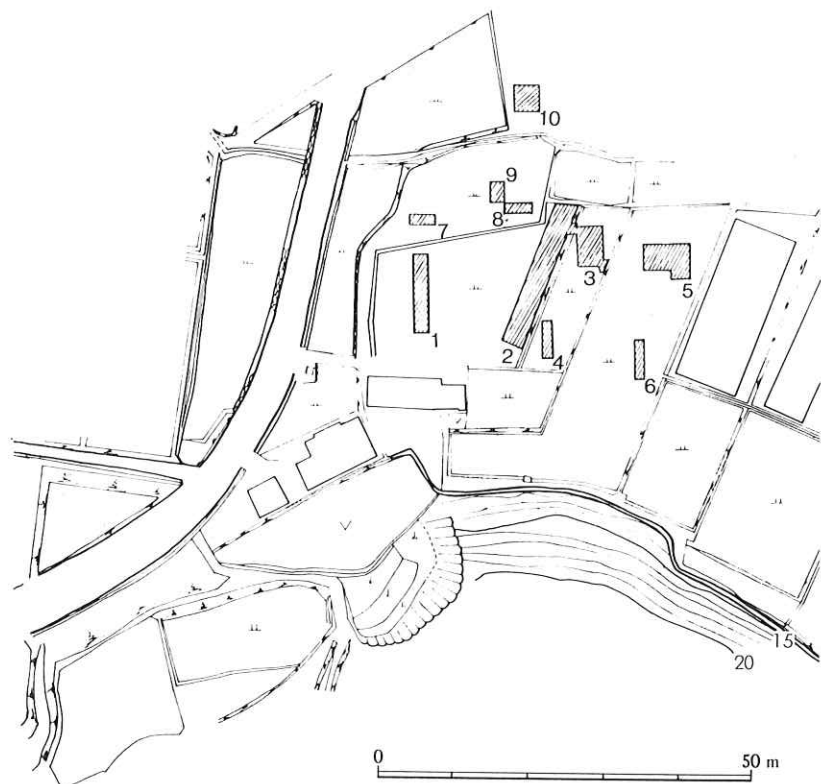


図9 調査区配置図

からは、弥生時代中期、後期の遺物が多数含まれている。

遺物 (図10・17~20、写真5・6上・10・11)

第1トレンチの出土の遺物は、壺<sup>つぼ</sup>、甕<sup>かめ</sup>、鉢<sup>たかつき</sup>、高杯、器台などがあり、各器種の器形は多種多様である。

旧河道の⑩砂層中からは、櫛描波状文と直線文 (A種)、櫛描直線文と竹管文 (B種) といった器面に櫛状工具等によって施文された文様をもつ土器片が9片発見されたが出土土器量に占める絶対量は少ない。

A種には1・3~6、B種には2が該当する。その中でも、強く器面に櫛描波状文を施文する1・4・5と直線文、波状文を弱々しく1本1本描くもの2・6がある。器種は養父町ササ遺跡出土の壺の例などから、壺の胴部破

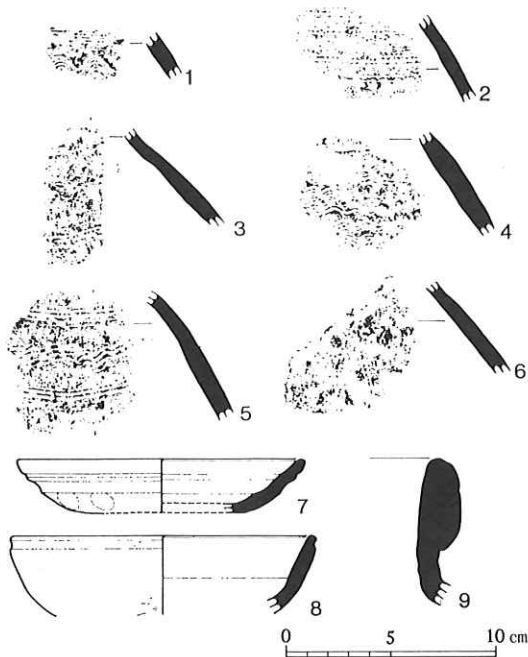


図10 第1トレンチ出土土器

片と考えられる。

同じく壺の口縁部を見ると、口縁部の形から三種類の器種が考えられ、A種-頸部から直立しつつ鋭く外反する口縁部をもつもので、口縁部を外に折り曲げることで口縁部(端面)をひろくとることができ、そこに加飾するものである。たとえば、平行する三条の沈線に縦のヘラ刻みを施した33、口唇部はナデ調整のみではあるが両端を上下に拡張した34、長い頸部からラップ状にひろく口縁部をもち、

口唇部には沈線を一条横走させる37、成形の段階で口縁部に粘土を貼り付けて、端部を上下に拡張するもので、その面に4条の平行する沈線を施文し、飾ることを意識して作った土器40・105がある。

B種には頸部からくの字状に内彎したのち外反する口縁部41、C種には頸部からくの字状に二段にわたり外反する二重口縁をもつ30・32がある。また二重口縁部をもち、口唇部が外に開く35と、やや外に開く小形の壺25、無頸壺と呼ばれる頸部から鈎状に折れ曲がり、口縁部の長さが短く、胴部上方に円孔を1ヶ所穿つ39などがある。

甕についてみると、大きく二つに分類することができる。それは、口縁部の形が二重口縁と呼ばれる形をとるものと、とらないものとに分けることができる。さらに二重口縁部をもつ土器群を細かく分けると口縁部に擬凹線を有する11と消失している2とがある。

二重口縁部の口唇部に擬凹線を施す土器群をA-1種とすると、10・12・14・17～20・23が該当し、特徴としては、頸部からくの字状に外反して二段にわたり直立する口縁部をもつもので、必ず口唇部に数条の擬凹線を施し、器面には縦方向のハケ目調整が行われ、胴部内面は下から上、横方向のヘラケズリを行う。また、同じ特徴をもつものであるが、11のように頸部からくの字状に屈曲する例もある。

続いて、二重口縁部の口唇部に擬凹線が消え、ヨコナデのみを施す土器群をB-1種とすると、その例としては13・15・16・21・22・26・29・31、106・107・108・110・113が該当し、26のように小型の甕もある。

これらの甕は、口唇部に擬凹線を施さないことが、前述したA-1種の土器と大きく異なる点で、その他の調整技法等についてはA-1種同様、器面には縦方向のハケ目、内面は胴部から頸部までヘラケズリを施すものである。

二重口縁部をもたない甕は、二種類ある。

まず、1に頸部を屈曲点として逆L字条に折れ曲がる口縁部をもつもので、口唇部は平坦な面をつくる例として、29・42・43があげられ、器面には縦、横方向のハケ目、胴部内面にはヘラケズリ、ハケ目が施されるもので器壁はきわめて薄い。

2として、頸部からくの字状に外反する口縁部をもち、端面は無文で、器面には縦方向のハケ目、胴部内面はヘラケズリを行う27・28・109・111・112がある。

甕の肩部分に付く把手、68・69がある。太い粘土紐を彎曲させて接合させたものである。例として、豊岡市女代神社遺跡、日高町祢布ヶ森東遺跡、京都府明石遺跡他多くの遺跡から発見され、甕、長頸壺の肩部に貼り付けているのが一般的である。

底部は形から4器種があり、大きくは丸底に近い底部をもつA種と、平底を呈するB種とに分けることができる。

A種には89～95が、B種には87・88・96～99が該当する。

A種には、底部に円孔を穿った有孔底部90と底面が上げ底を呈し、底径が1.6～3.2cm前後をはかる89・91～95とに分けることができる。前者は乳房状に突出する形の底部で器外面は縦方向のハケ目、内面ヘラケズリを行っている。後者は甕の底部と思われるもので、器面には縦方向のハケ目を施す。

内面はヘラケズリである。

高杯は完形品が全くなく、高杯の成形段階における製作順序から、杯部・脚台部（柱状部と裾部）に大きく分かれるため、その接合部分や屈曲率の高い部分が剥離している。各部分によって器種の分類をしなければいけない。

杯部には3種類8個体が見られる。杯部の口縁部の形から口唇部が水平に突き出る形で椀状、あるいは浅い受け部をもつA種、椀状を呈し、内彎ぎみに立ち上がるやや深い受け部をもつB種、逆ハの字状に外方に向けて鋭角的に立ち上がり、深い受け部をもつC種とである。A種には48・56・57、B種には53・54、C種には58、59が該当する。

A種は48のように口径も大きく、椀状の受け部に口唇部をつまみ出してつくられる。外面はヘラミガキ、内面にも入念なヘラミガキが施される。この48に対して56・57は皿状の受け部に外反しながら水平につまみ出す口唇部をもつもので、器面の調整にはヨコナデが用いられる。また胎土には精良な粘土が使用されている。

B種はやや深い皿状を呈するものであるが、口唇部に若干違いが見られる。それは53のように内面に突き出るものと、杯部の曲線のまま立ち上がる単純口縁で外面に沈線をもつ54である。

C種は、前述した逆ハの字状に外反する単純な口縁部である。杯部と脚台との接合部分は貼り付けるものであり、内外面にはヘラミガキ調整が施される。

その他に、浅くて口径の小さな杯部で、口唇部が外反する60がある。

脚部は、柱状部と裾部とに分かれるが、柱状部は3器種7例がある。特徴として、柱状部分が長く、中実のものA種、柱状部分が中空で、脚頂に円盤を充填することで、杯部と接合が可能となるものB種、柱状部分が中実を呈し、やや小型のものC種とに分けることができる。

A種は63、B種は62・74、C種には75・77・78が該当する。

A種は柱状部の脚頂が杯部の底になるもので、杯部を柱状先端で結合させ、粘土で固定することによって一つの高杯を形づくる組み合わせ式高杯と言え、先端部分の粘土はその杯部を示す。

器面は縦方向のヘラケズリ、内面には棒状の成形具を成形の段階で柱状部に挿入し、乾燥した段階で抜いたものであろう。斜行するハケ目を調整に用

い、脚端には一対の透かし孔を穿つ40・56・57の杯部と組み合わせるものであろうか。

B種は円筒状を呈する中空のものであり、柱状部内面には縦方向の絞り目が見られ、脚端付近には横方向の74、縦方向のヘラケズリが施される62、脚端には円い透かし孔が穿たれる76もある。

C種は柱状部が中実のものであるが、脚頂が杯部の底になる75や杯部を接合した痕跡を残す77などがあり、柱状部分の成形についても、あらかじめ粘土の柔らかい段階で円柱状の成形具を柱状部に入れておくか、挿入して芯部を中空の75と58のように粘土紐を円錐状に巻き上げたのち、径を縮めたものとに分かれる。器面は縦方向のヘラケズリ、内面は78の場合ハケ目調整を行っている。

脚台の裾部は、脚端の形から2器種5例があり、脚端の単純なものA種と、肥厚あるいは上に拡張するB種である。

A種は66・82・84、B種には85・86が該当する。

前者は径が大きく、土器の中心に対して裾部の外反度が大きい66と、脚径が小さく、中実の柱状部に外反度が大きく、低い裾部のつくものと、中空の柱状部からハの字状に外反する高い裾部をもつ84といろいろな器種がある。66の脚代裾部には56・57の裾部が付くものであろうか。

後者は、器壁の厚い裾部で85のように先端が上方に突き出る形のものが特徴的である。

低脚杯は、完全な形に近い73と脚台のみの81とがある。この土器は低い脚に浅い碗状の杯部をもつものであるが、器面の内面はきめの細かいヘラミガキによる調整が行われ、胎土には雲母が見られる。

碗は、口縁部から胴部にかけての破片であるが、その器形から二つに分類ができる、胴部が内彎する形を呈し、口径16cm前後をはかり、口縁端部が丸いA種と、胴部は碗状を呈し、内彎しながら立ち上がる口縁部をもち、口径20cm前後をはかる。端部の丸いB種。内彎しながら立ち上がる口縁部で端部が内側へ鋭く曲がるC種とに分けることができる。A種は44・45、B種は46・47、C種は52が該当する。

A種はあまり内彎しない胴部に縦方向のハケ目、あるいはヘラケズリ調整を行い、内面は粗いヘラケズリを施している。B種は内彎する胴部と口唇部

#### 4 宮内遺跡

に弱いナデを施しており、縦方向のハケ目、内面には粗いヘラケズリを行っている。C種は内彎しながら立ち上がる口縁部で端部が内側へ鋭く曲がるものである。

器台は、杯部と脚台（柱状部、裾部）とによって構成される土器であるが、形の大小によって分類すると49・50・51・55の大形のものに対し、72の器台は小形で完全に近い器形である。

杯部と脚台とに分けて述べると、杯部では口唇部に数条の沈線を施すものをA種、無文のものをB種とする。A種には50・51、B種には49・55・72が該当し、細かく見るとA種は口唇部がやや傾き、器壁の厚いものもある。B種は直立に近く、少しくぼむが口径は大きい。49・55と口唇部が外方に傾斜するもので杯部と脚台との区別が明らかでない72がある。この土器は多紀郡西紀町口坂本遺跡出土の器台に類例がある。

脚台の裾部は、その形から3器種5例がある。裾部の脚端が単純にひろがるものA種と、脚端にわずかなくぼみをもつB種、低い脚台を有するもので裾部において大きく開くC種である。

A種には64・67、B種には65・83、C種には82が該当する。三者共に外面には縦方向のハケ目調整、内面にはきめの細かい斜方向のハケ目調整が施される。

台付鉢の脚台が3例、70・71・79がある。椀形の鉢につく脚台で、受皿部と裾部とが細く締まったもの70とやや太めのもの71・79とに分けられるが、裾部はハの字状に外反するものであるが、脚台は低く、脚径も小さい。

80は蓋形土器のつまみの部分のみ残っているもので、笠形を呈し、蓋頂には浅い凹部をもつものである。

#### 第2トレンチ

調査（図9・11・12、写真4上）

第2トレンチは南北に長い2×23.8mをはかる。地目は田である。調査は東から西へ流れる谷の旧河道を横断する形となり、河道の幅や土層の堆積状況を知ることができた。河道は幅7m以上、地表面より深さ約1m未満である。

このトレンチを設定した所からは、かつて田の地下げ中に直径30cm前後の柱痕が3本掘り出されている。この地下げにより遺構面は削平されてしま

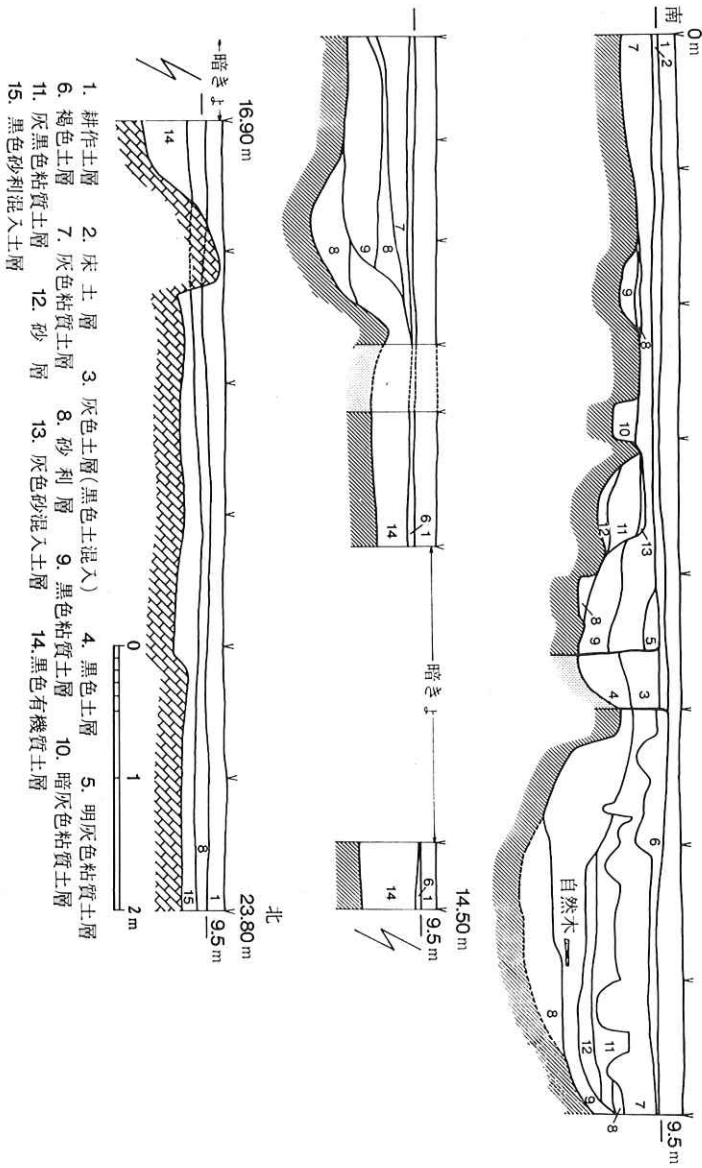


図11 第2トレンチ西壁土層図

#### 4 宮内遺跡

っていたが、かろうじて柱穴の掘り方らしきものが検出され、建物跡SB-3を想定した。この建物跡はトレンチの北端から検出されたため、建物全体を知ることができず、東西に直線的にならぶ柱穴(12~14)のみである。12には、柱痕が残り、根がための石が4個置かれている。また、同様に14においても人頭大の石4個が支えとして置かれたらしい。建物跡は、12~14(3.8m)、12~13(1.94m)、13~14(1.86m)をはかる。おそらく北側に延びていると思われる。掘り方は楕円形を呈しており、柱の径は12が20cm、13が35cm、14が25cmをはかる。

第2トレンチ内において注目すべき遺構がある。それは、溝の下層に設けられた梯子を再利用した飛石状の水くみ場(洗濯場)と名付けたものである。旧河道の東側川岸より一段低い所に位置し、写真4(上)右が上流にあたり長さ30cm程のやや平らな石を2個上流に向けて置き、一段目で斜めに切断した梯子の基部を二本並べ、その外側に頭大の石を置いて固定している。そして、さらに下流の左岸に平らな石を置き、途中で鋭利な刃物で切断したらしい梯子を二本斜めに並べている。小形の甕5はその石と梯子に接して発見された。

遺物(図21・23、写真5・7~10)

遺物は、旧河道内から自然木、梯子、曲げ物の底、加工木、建築用材等々が発掘された。そのほとんどは、⑧砂利層中の弥生土器、土師器と共に出土している。遺物は土器と木器とに分けることができ、土器には、壺、甕、台付鉢、高杯、蓋がある。

壺1の破片は円形の貼付文を貼り、胎土がチョコレート色を呈し、河内地方出土の土器に非常に似ているため、河内地方で製作されたと思われる。その他の壺破片は口縁部の形から5器種ある。口縁部は頸部から大きくくの字状に外反し、端面に3条の沈線(凹線)が施される10、長い頸状の頸部をもつ口縁部4・30・31、頸部から内彎しながら外反する口縁部の口唇部に擬凹線を施す3、頸部からくの字状に2段にわたる二重口縁部をもち、口唇部に沈線を横走させる8、頸部からラップ状に開き、二段にわたる二重口縁をもつもので、口縁部に沈線を施す11などがあり、口縁部の形だけ見ても、弥生時代後期から古墳時代前期のものまで含まれている。頸部から胴部にかけての12は器壁も厚く、器面には斜行するハケ目、内面はヘラケズリを施す。



甕は頸部からくの字状に外反する単純な口縁部をもつ28・29、また口唇部に施される擬凹線の有無によって大きく2つに分けることができる。擬凹線を施すものA種、施さないものをB種とすると、A種には5・6が該当し、B種には、2・7・9・27が該当する。前者は頸部からくの字状に二段にわたって外反する二重口縁部で、5は完全な形を呈する。この小形の甕は、最大腹径が口径よりも小さく、頸部から鋭く屈曲したのち、口唇部は直立に近く立ち上がるものである。器面は磨滅のため調整技法は不明であるが、内面は緻密なヘラケズリが施されている。底部はやや丸底に近い形となっている。

6は、頸部からゆるやかなくの字状に外反する単純な口縁部をもつ2、頸部から二段にわたり外反する二重口縁部で口唇部が傾斜する9とやや直立ぎみの7とに分かれる。7の場合は器面に縦方向のハケ目、内面はヘラケズリを施している。この甕はA種の5の口唇部が変化したものと考えることができ、全体の器形は後述する4トレンチの7の甕などに類例が求められる。

甕の底部に台を接合した台付甕がある。24・25は台付甕の胴部から脚台にかけての接合部分が剥離したものである。

底部は7例図示したが、底部の形から3器種に分類できるかと思われる。A種は、底径2.5cm以下の小さいもので丸底に近い平底で13～15が該当する。B種は、底径5.5cm以上をはかる平底で16・17・19・32が該当する。中でも17は上げ底ぎみである。器面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリによって成形している。その他に平底の底部からきわめて外反度の高い胴部へと続く18・33がある。

高杯は脚台部分の柱状部先端と裾部の破片のみである。柱状部分の23は脚頂が杯部の底部となるものである。裾部の26は脚端がやや突出するもので鏝状を呈する。裾近くに円形の透かし孔を穿っている。

蓋のつまみの部分20～22の3例がある。この蓋形は笠形を呈するもので、蓋頂の凹む20・22と平坦な21とがある。

次に図23に示した旧河道内から出土の木製品、自然木について触れると、

1. 木製の曲げ物の底板と思われるもので、長さ19.3cm、幅6.0cm、厚さ0.7cmの1枚板で、両端は楕円形を呈する。
2. 用途不明の木製品で、網のタモの柄のごとく、棒の先端を二つに割り、別のもで固定する方法をとっている。この木製品には柄として使ったためか

#### 4 宮内遺跡

左上がりに巻き上げた紐ずれの痕跡が残り、断面は楕円形を呈し、木柄としての形を整えていると思われる。長さ 32.6cm、直径 - 上部 3.5cm・下部 - 2.9cm をはかり、材質はイチイガンである。

3、4 は建築用の加工材と思われるが確証はない。3 は現在長約 35cm、幅約 7.2cm、厚さ約 2cm をはかり、1 枚板である。4 は現在長約 61.7cm、幅約 8.4cm、厚さ約 1.4cm の一枚板である。

5 は梯子の最下段の部分と思われ、下端部は形が整えられている。上方は前述した「水くみ場」の板材として再利用されたため斜めに切断されている。残存する長さ 44cm、幅下方 8.7cm、上方 10.1cm、厚さ 4.2cm、踏み段の高さ 7cm、下端から踏み段までの高さ 36cm をはかる。踏み段は一段しか残っておらず、裏面には磨滅の痕がある。

6 は 5 の梯子が切断されたものかとも考えられるもので、途中から切断されている。残存部分の長さ 39cm、幅約 9cm、厚さ 3.2cm、踏み段の高さ 9.5cm、下端から踏み段までの高さ 35.8cm をはかる。梯子の表面には、木板に対して直角につくり出した棧状の踏み段を設けており、6 では一段のみ残っている。

7 は梯子の最下段の部分で、下端部は末端処理が行われている。上端は鋭い刃物で切断されている。残存する長さ 40.2cm、幅下方 8.5cm、上方 10.5cm、厚さ 3.7cm、踏み段の高さ 9.7cm、下端から踏み段までの高さ 35.4cm をはかる。踏み段は木板にたいして直角につくり出しており、一段のみ残っている。裏面は磨滅している。

8 は 6 と同様、両端が切断されているもので、他と比較して幅がひろく、平均して 13cm をはかる。残存長 41cm、幅 13cm、厚さ 3cm、踏み段の高さ 5.4cm、下端から踏み段までの高さ 37.1cm、踏み段は一段のみ残存する。

#### 第 3 トレンチ

##### 調査 (図12)

第 3 トレンチは南北 4m、東西 5m、深さ 0.7m をはかる。このトレンチ内からは、④黒褐色土層を基盤土層とする建物跡 S B - 2 と<sup>ま</sup>柵列かと思われるピット 8・9・10、集石遺構 1 を検出した。

建物跡 2 はトレンチの北東部に位置し、④層の検出面を精査した段階で柱穴と柱痕とを確認したが、柱穴の重複、土層の観察から建て替えは認められ

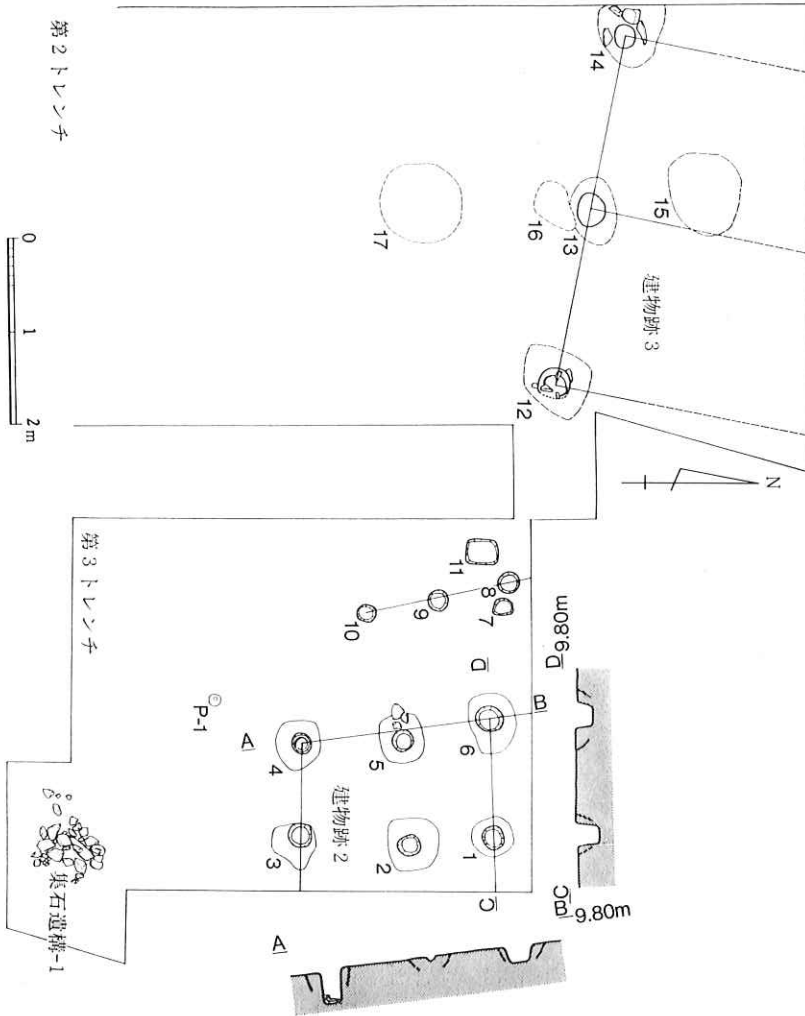


図12 第2・3トレンチ平面図

なかった。調査の結果からすると、建物跡の南西隅を確認しただけにとどまり、北側、東側には当然柱穴が存在するものと思われる。

この建物跡の規模は2間(2.05m)×1間(0.98m)+αを数え、地形的に見て東西棟であろう。

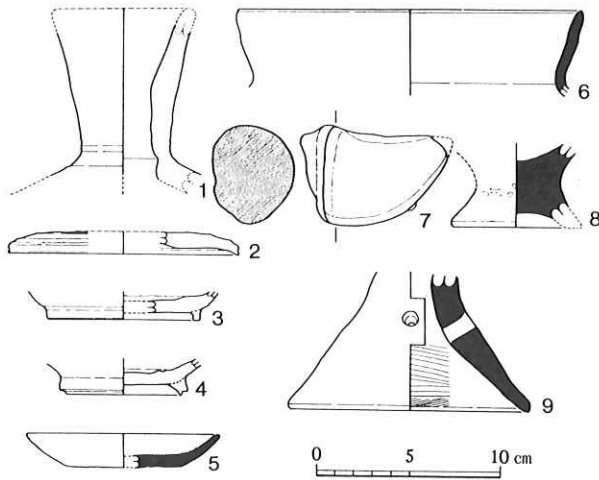


図13 第3トレンチ出土土器

各柱間の寸法は、1～2は0.92m、2～3は1.19m、3～4は0.98m、4～5は1.1m、5～6は0.96m、6～1は1.27m、2～5は1.12mである。

柱の掘り方は1-41×43cm、2-53×55cm、3-50×49cm、

4-50×54cm、5-52×47cm、6-52×65cm、4は柱痕を残しており、径13cmをはかる。5の柱穴の周囲には人頭大の石を置き、柱の補強に使用したのであろう。

8・9・10は一列に並ぶため柵列かと思われる。掘り方をもたない素掘りのもので、径は8-24cm、深さ9cm、9-22cm、深さ27cm、10-20cm、深さ16cmをはかる。

集石遺構1はやや方形に区画された中に拳大程度こぶしの大きさの自然石を集めたもので、建物跡に関係するものと思われる。

遺物(図13、写真5上)

遺物は直接遺構に伴うものと、二次的な堆積層中に含まれるものとに分けられ、建物跡SB-2に伴うものとして、柱穴2内埋土中から出土した須恵器の長頸壺1、3からは須恵器の杯4、黒色土器である皿5があり、①層からは須恵器の杯蓋3が出土しており、遺構面よりも上層の遺物には、甕、台付鉢、把手、高杯の6～9がある。

2出土の須恵器の長頸壺1は頸部から口縁部にかけての破片である。あまり口縁部は外反しない。3からは黒色土器5と高台付杯4が出土、黒色土器は口縁部が外反するものである。高台付杯4は底部と体部との屈曲点から外

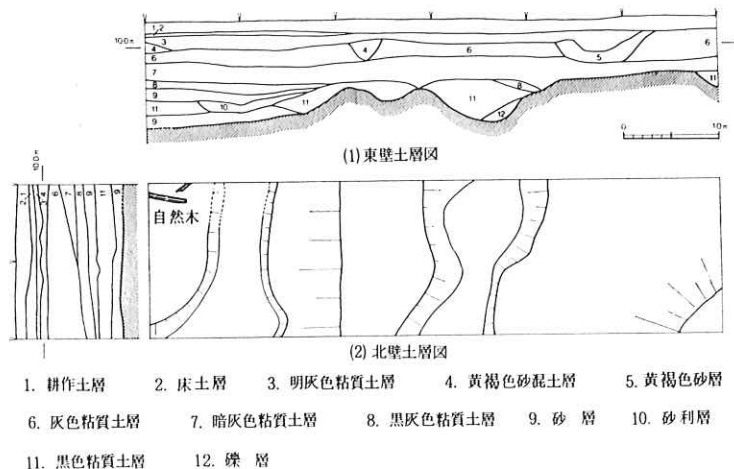


図14 第4トレンチ平面図・土層図

にふんばる高台を貼り付けるものである。杯蓋2は口縁部端部があまり屈曲せず、天井部もふくらみが少なく、平らな器形をとる。杯3は体部と底部の屈曲点に高台を貼り付ける4と器形上変化はないが、高台が直立する。

包含層の遺物には、頸部からくの字状に外反する甕6、把手の7、低くて小さな脚径をもつ8、高杯の脚台で円錐形を呈し、脚端が直線的な9がある。

遺物の所属する年代として、6は古式の土師器、7・8・9は弥生時代後期前半に求められる。

#### 第4トレンチ

##### 調査(図14)

第3トレンチと同じ田に設定したもので、調査区は1.5×6mをはかる。調査区域内からは旧河道がここでも発見され、枝状を呈している。

土層は大きく3時期に分けることができる。第1は、弥生時代の旧河道の時代である。これは⑧黒灰色粘質土層、⑨砂利層から⑩の礫層<sup>はき</sup>までである。この旧河道中からは弥生時代中、後期の土器や自然木が出土した。また、木杭<sup>くい</sup>の列もある。第2は、旧河道埋没後、土砂が自然堆積する時期である。ほぼ水平に、⑥灰色粘質土、⑦暗灰色粘質土が堆積する。第3は、自然堆積後、溝が掘られた時期から現在までである。

4 宮内遺跡

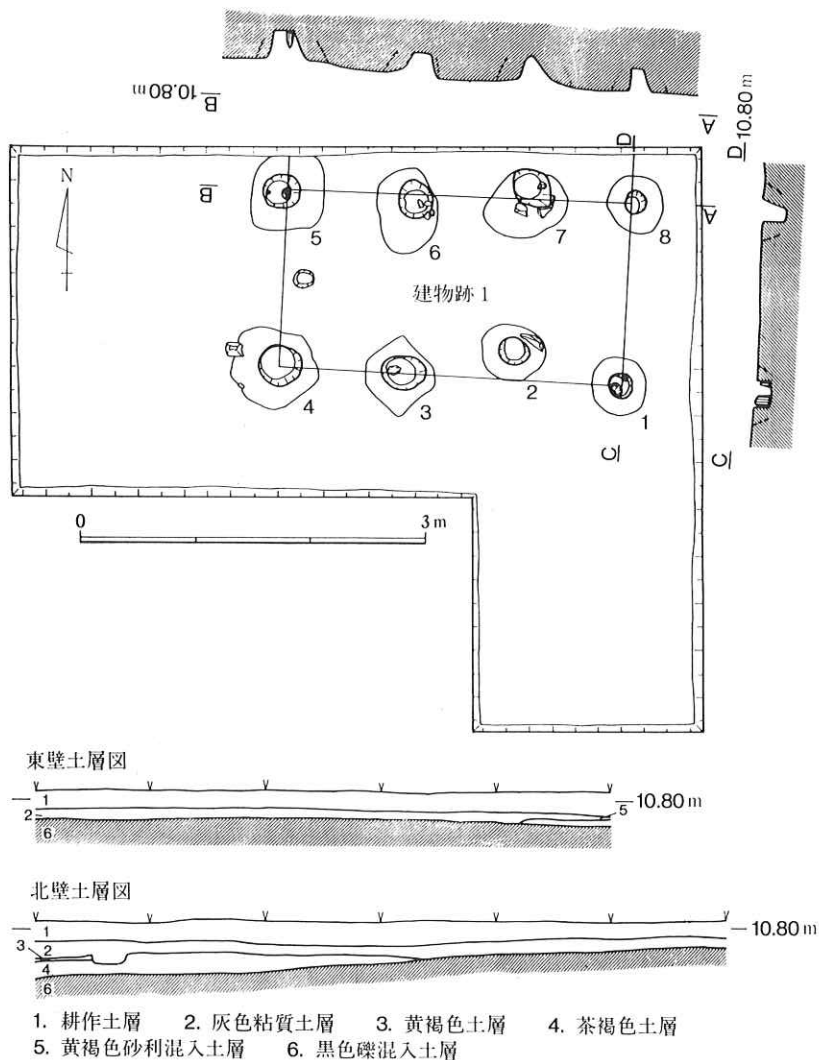


図15 第5トレンチ平面図・土層図

遺物 (図22、写真6下・7下・10・11)

遺物は弥生土器、土師器のみが出土した。上層から出土した土師器を除いて⑨砂層、⑩黑色粘質土層中より弥生土器が出土した。

土師器は壺1がある。底部を欠くが、口縁部はやや外彎ぎみに立ち上がるもので器形は弧状を呈する。

弥生土器には甕、高杯、器台の三器種がある。

甕はその器形、文様から分けると、A種、二重口縁部に擬凹線を施すもの、B種、二重口縁部に擬凹線を施さないもの、C種、二重口縁部をもたないものである。

A種は引き締まった頸部に逆L字状を呈する二重口縁部がつくもので、その端面に数状の擬凹線を横走させる5・6である。

B-1種は器形から大小に分けられ、小形で頸部からくの字状に外反し、二重口縁部を付すもので、口縁部下端面の稜は鋭い。また、最大腹径は口径よりも小さい。外面はハケ目、内面は胴部のヘラケズリが見られる3・4である。B-2種は大形で、B-1種同様頸部からくの字状に外反する二重口縁部をもち、口唇部の長さは直立し、B-1種に比較して短い。最大腹径は口径よりも大きく胴部内面にヘラケズリが見られる2・7である。

C種はA、Bとは器形を異にするもので、頸部からくの字状に大きく外反するものである。外面には頸部以下に縦方向のハケ目、胴部内面はヘラケズリ、8・15・16が該当する。

底部は甕のものと思われる平底が3例ある。上げ底ぎみに底部中央がくぼむもの9、平底で布目の圧痕を残すもの10、底径の大きな平底18である。

高杯は3器種3例ある。椀状の杯部に二重口縁部を付し、口唇部に五条の擬凹線文を横走させるもので、非常に緻密なヘラミガキを加えている12。B種は脚台から斜め上方にひらく擬凹線を施文しない口縁部で、内外面共にヨコナデを施す11。C種は脚台のみであるが、裾部に鏢状の突帯をめぐらし、柱状部は中空である。柱状部は縦方向のヘラミガキ、裾部内面は逆時計回りのヘラケズリを行う13がある。また、脚柱部のみが残存している14も出土しているが、内面横方向のヘラケズリが見られるほか、上下にわたって外反度の大きい脚柱部である。

#### 第5トレンチ

調査(図15、写真4下)

第5トレンチは東西6.0m、南北5.0mをはかる。鉤状に設定したトレンチで深さ0.5m、地目は田である。この調査区は第3トレンチで確認された

#### 4 宮内遺跡

建築遺構の範囲を確認する目的をもって行われたもので、建物跡SB-1を発掘した。

この建物跡は3間×1間以上の柱間をもつもので、1～4までの長さ約3m、柱穴と柱穴の間は平均約1mをはかり、1～8の間は1.55m、4～5の間は1.52m、5～8までの長さ2.98m、柱穴と柱穴との間は平均約1mである。ただ2と7の位置がほかの柱穴より20cm北へ出ている。この建物跡はまだ未調査である北側の地区に延びるものと思われ、建物の南側部分のみがトレンチにより発見されたと思われる。

土層は上から①耕作土層、②灰色粘質土層、③黄褐色土層、④茶褐色土層によって構成され、東から西へ傾斜する地形に自然堆積している。

遺物は②③④層内に須恵器、土師器が含まれていたが、細片のため図示していない。

#### 第6トレンチ

調査(図16)

第6トレンチは2×4m、南北に設定した。地目は田である。

土層のありかたは、谷の中央部を流れる旧河道が自然堆積していく状況を呈し、④暗褐色粘質土層から⑧砂利層、⑪砂層までと、旧河道が埋没したの

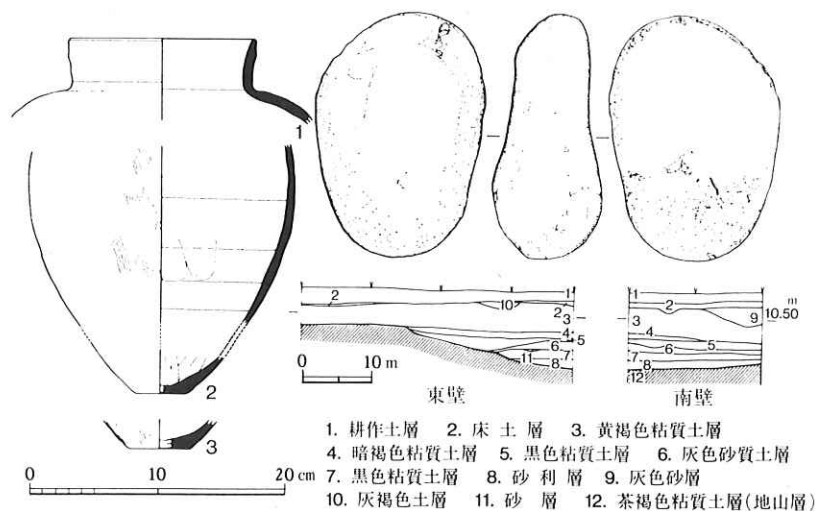


図16 第6トレンチ出土遺物・土層図



ち堆積した土層、①耕作土層、③黄褐色粘質土層、④灰褐色土層によって構成されている。前者は旧河道が流れていた時代を示し、弥生時代後期から古墳時代にかけての頃と考えられ、後者は須恵器の杯碗を含むことから奈良時代以後堆積したものと思われる。

旧河道は約15度の傾斜をもって南の方へ下がり、トレンチ内南壁近くの⑧砂利層中から、弥生土器、木製品、木の実等が採集された。

遺物（図16・23、写真8・9）

⑧砂利層の堆積した旧河道の時代と、③黄褐色粘質土層が堆積した時代とに分けられる。⑧層からは弥生土器、建築材（蹴放材<sup>けいはち</sup>）、盤状木製品、木の実（桃）などが出土した。③層中からは須恵器の広口壺が出土している。

土器について触れると、弥生時代の壺1は引き締まった頸部にやや外方へ開きぎみに直立する口縁部である。甕2は底部を穿孔したもので胴部と底部とが離れているが同一個体と考えることができる。最大腹径が胴部上方にあり、器面には煮こぼれと思われる炭化した付着物を見る。底部3は復元底径4cmをはかり、2に比して大きい。

続いて、建築材として、蹴放材と思われる9は扉板を受けるもので、現在長約77.4cm、幅約18.2cm、厚さ約2.7cmの長方形の一枚板である。両端に欠け込み仕口があり、欠け込み間隔は50cmである。そして、ほぼ板材の幅中央に位置する楕円形を呈する軸摺り穴が下端近くに設けられ、穴の大きさは3×2.5cmをはかる。この穴は方立てを受けるものと考えられる。板の右側端は表裏とも段をもつ、板面は図示した方には木目が磨滅しており、扉等ですり減ったと思われる。それに対して、裏面は使用の痕跡を残していない。

類例として、三重県津市納所遺跡<sup>のうそ</sup>出土の蹴放材があり、扉材と共に出土しており、扉戸の構造を復元することが可能となった例である。10の盤状木製品は四つに大きく割れているが、精巧なものではなく、むしろ9と共に出土していることを考え合わせると、盤状の鼠返し<sup>ねずみ</sup>の類かと思われる。横34.5cm、縦24cm、厚さ6cm、えぐりの部分、横20.5cm、縦14.7cm、深さ4.2cmをはかる。

木の実<sup>きのみ</sup>は2個出土したが、その形から桃の種子と考えることができる。

石器は⑧砂利層中から出土した砥石<sup>と</sup>4がある。足形を呈するような上方に開く円礫である。石器等を磨くのに使用したためか表裏、側方二面が磨滅し

#### 4 宮内遺跡

ており、つややかで、なめらかな石面である。砥石の幅 19.2×13.4cm、厚さは 8.6cm を最大とする。

##### 第30トレンチ

##### 調査

出石神社に向かって東から西に張り出す丘陵の中腹に位置する。3.5×1.5mのトレンチである。土層は水平に堆積し、平安時代の遺物包含層である。深さ0.5mの所から地山土層上に、長さ30~40cm程の石を組んだ遺構を検出した。この石組遺構の性格は明らかにすることができなかった。石組遺構の上面に黒色土器が底部を上にして、また、石組の中から石槍を発掘した。

##### 遺物 (写真23・11)

黒色土器 63・64 は、内面を黒色化した畿内という黒色土器A類に属する。器形は碗となるもので底部の切り離しは糸切りである。形態的には糸切りの平高台をもつ須恵器を模したもので、わずかに高台を意識してつくりだすものである。製作年代は10世紀から11世紀に求められる。

石槍は先端部分のみが折れた状態で発見された。石槍に伴う遺構はない。長さ7cm、中央部分の幅3cm、厚さ1cmをはかる。刃部は押圧剝離を施している。石材はサスカイトである。弥生時代に製作されたものと思われる。

##### まとめ

宮内遺跡の付近には1974年に刊行された「特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」第3分冊、兵庫県教育委員会によると、出石神社を中心として、出石神社遺跡があり、少しはなれて宮内黒田遺跡が点在する。

出石神社遺跡は、神社の境内から縄文、弥生、古墳時代の土器・石器などが多数採集されること、また、天日槍の伝説、但馬一の宮として古代から連続と続く歴史をもつ神社であることから、縄文、弥生、古墳時代、またそれ以後出石神社を核とする集落が営まれていたことは明らかである。ここに再録した宮内遺跡も、前述した1979年、西谷英昭・前田豊邦両氏によって報告された弥生時代前期の土器が出土した宮内遺跡 (=宮内・黒田遺跡) も出石神社遺跡を構成する遺跡と考えられる。いいかえれば、出石神社遺跡に包括される遺跡の一つであり、枝葉の遺跡と理解される。

そのような見方に立って、あえて宮内遺跡を出石神社遺跡と名付けたのが拙稿『出石町史』第1巻「考古学から見た出石」1983年である。資料編を書

くにあたり、既に刊行された報告書もあり、旧来の遺跡名で報告した。

宮内遺跡の中心部分は第1～10トレンチまでの出石神社の東南の地域にひろがっている。この地域が丘陵と丘陵とはさまれた谷に位置し、調査によって明らかとなった河道は枝状に分かれて流れていた。当時の生活面は、いかえれば、集落は、出石神社から丘陵にかけての微高地、あるいは高台に立地していたと推測される。

例えば、第2トレンチの旧河道の中に弥生時代後期後半に位置する甕と梯子を再利用して水くみ場をつくっていること。倉庫などの板扉に伴う蹴放材、魚をすくう「たも」の柄に似た加工された棒、盤状木製品、曲げ物の底板状木製品、多量の土器、石器などが多数出土した。これらのことから、弥生時代前期、宮内黒田遺跡に伝わった稲作農耕と農耕社会の誕生は、この出石神社を中心とする地域に定着したのち、成長、発展していったものと思われる。推測の域を出ないが出石神社のカミが誕生し、祭られていたのではなかろうか。換言すれば、現在の出石神社の礎となるカミは、弥生時代の農耕社会の中から生まれ、ムラの守護神として成長し、カミを中心とする結びつきの強い村落を形成していったものと想像される。

そして、「古事記」に書かれた新羅国の王子、天之日矛が渡来し、たずさえていた八種神宝を伊豆志の八前大神として、天之日矛を祭る但馬一宮＝出石神社の成立である。

その後、神床家に鎌倉時代に書かれたと言われる出石神社の境内図がある。その絵図によると、境内には弁才天、護摩堂、五重塔、禁足地などがあり、第2. 3. 5トレンチから検出された建物跡 SB—1～4の場所には、御崎殿と呼ばれる建物が見える。第1～4の建物跡と御崎殿とを結び付ける積極的な資料は今のところ何もないが、建物があっても不思議ではない地域である。

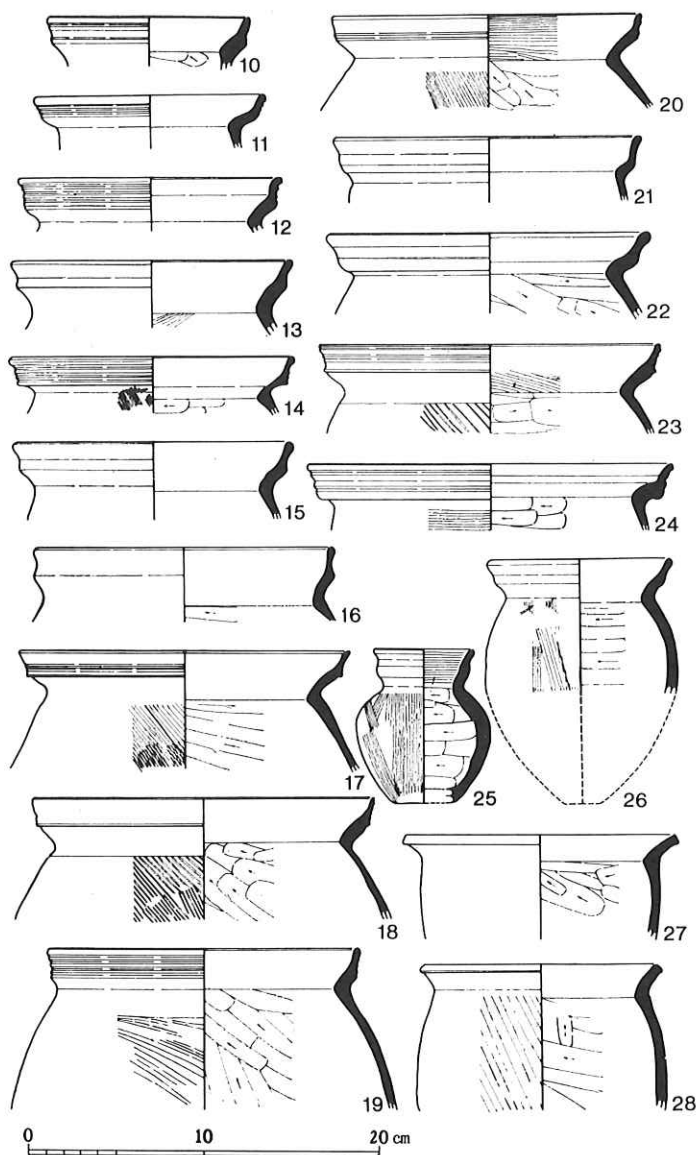


図17 第1トレンチ出土土器(1)

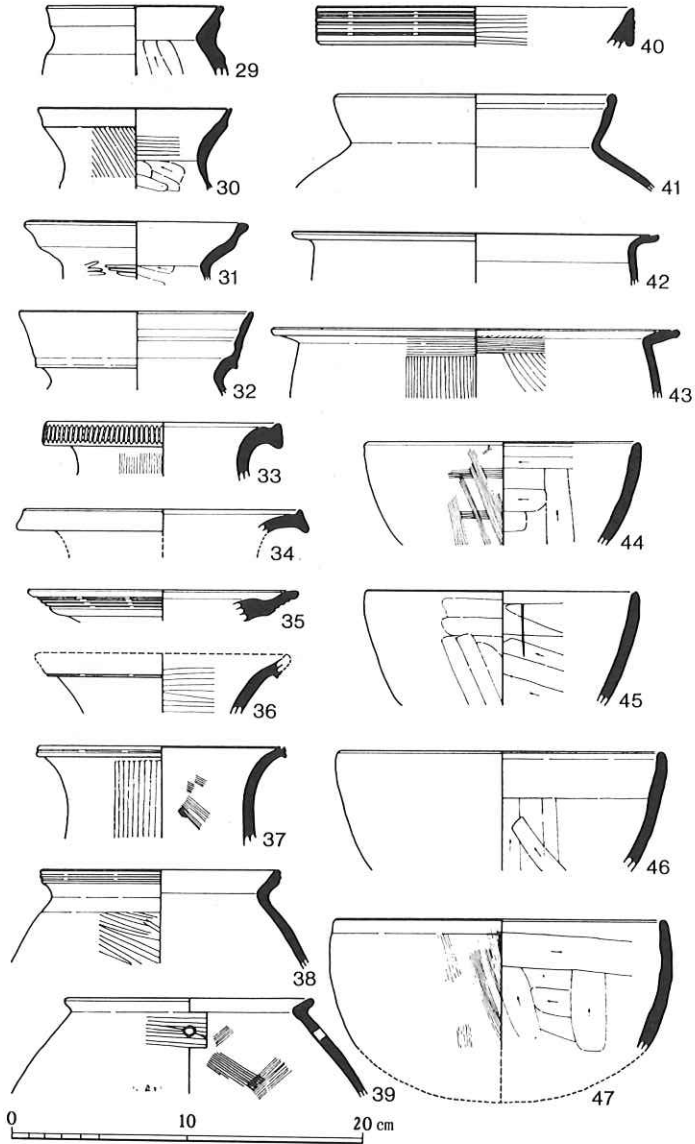


図18 第1トレンチ出土土器(2)

4 宮内遺跡

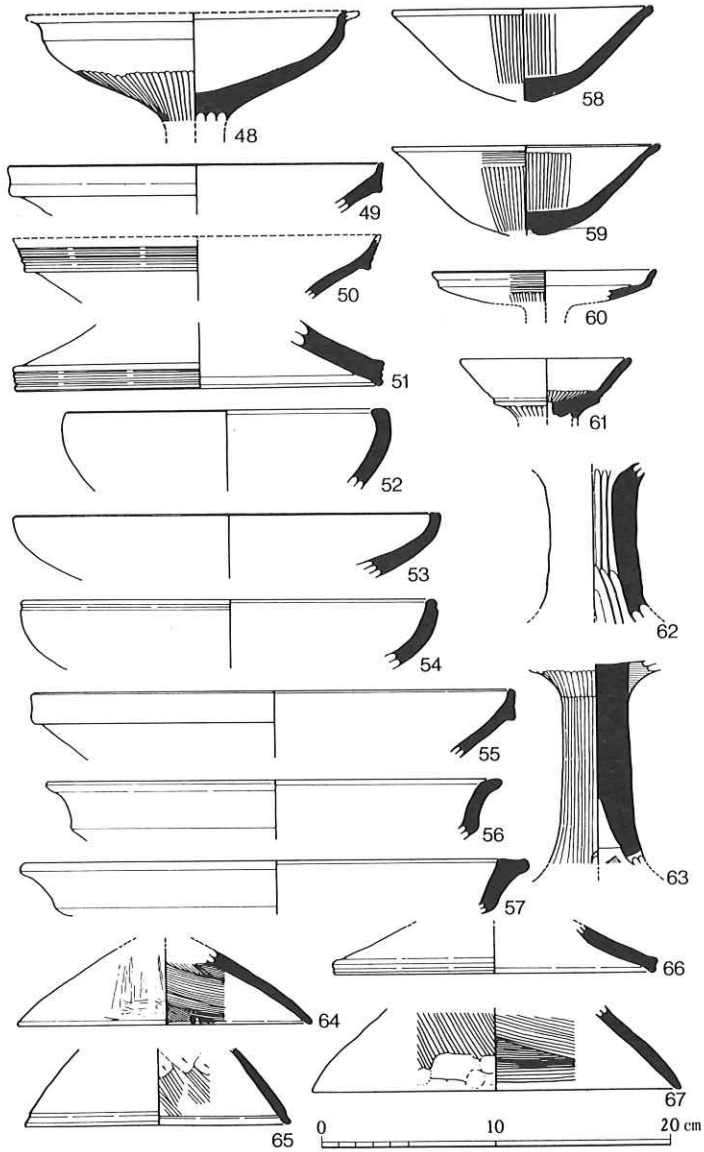


図19 第1トレンチ出土土器(3)

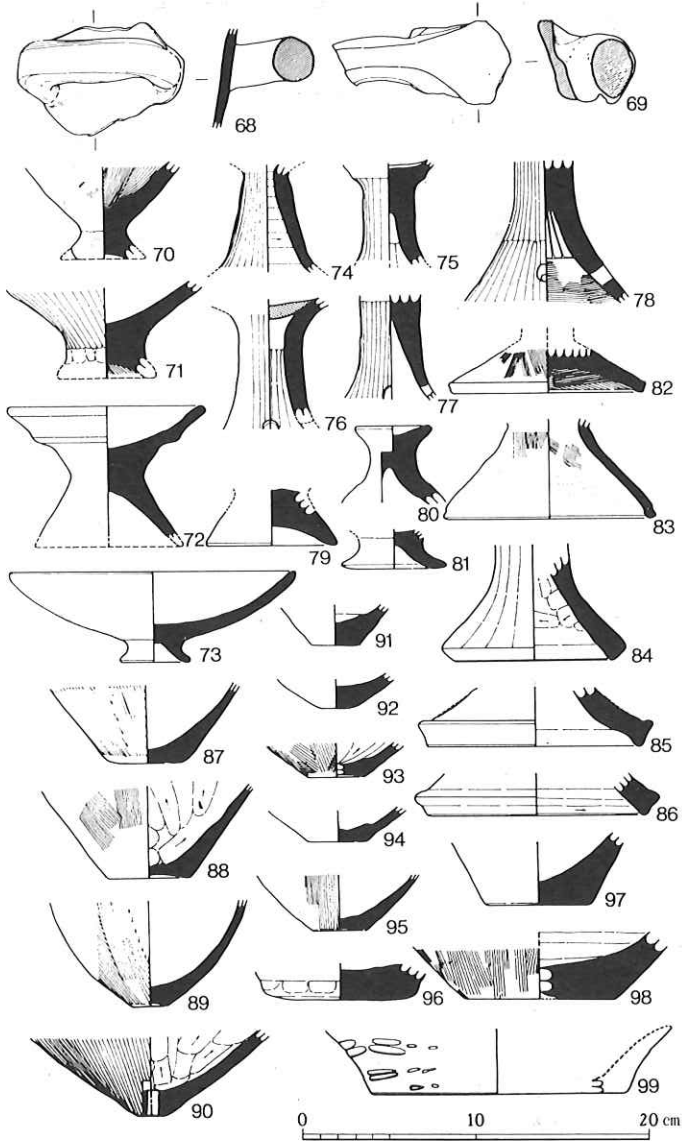


図20 第1トレンチ出土土器(4)

4 宮内遺跡

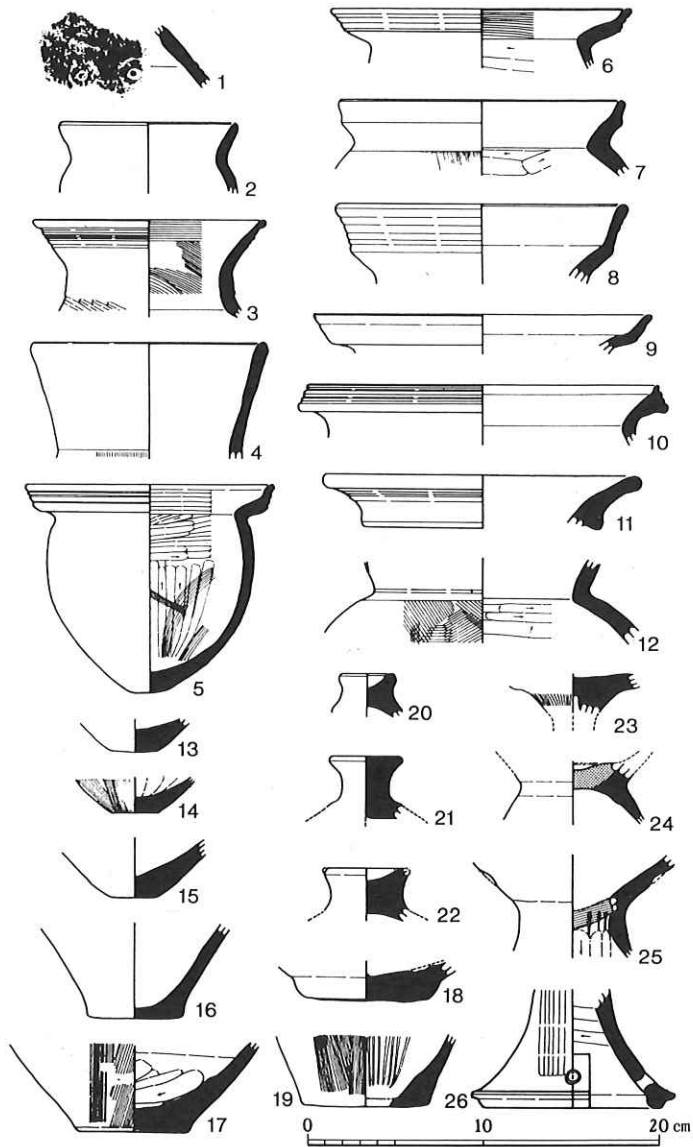


图21 第2トレンチ出土土器



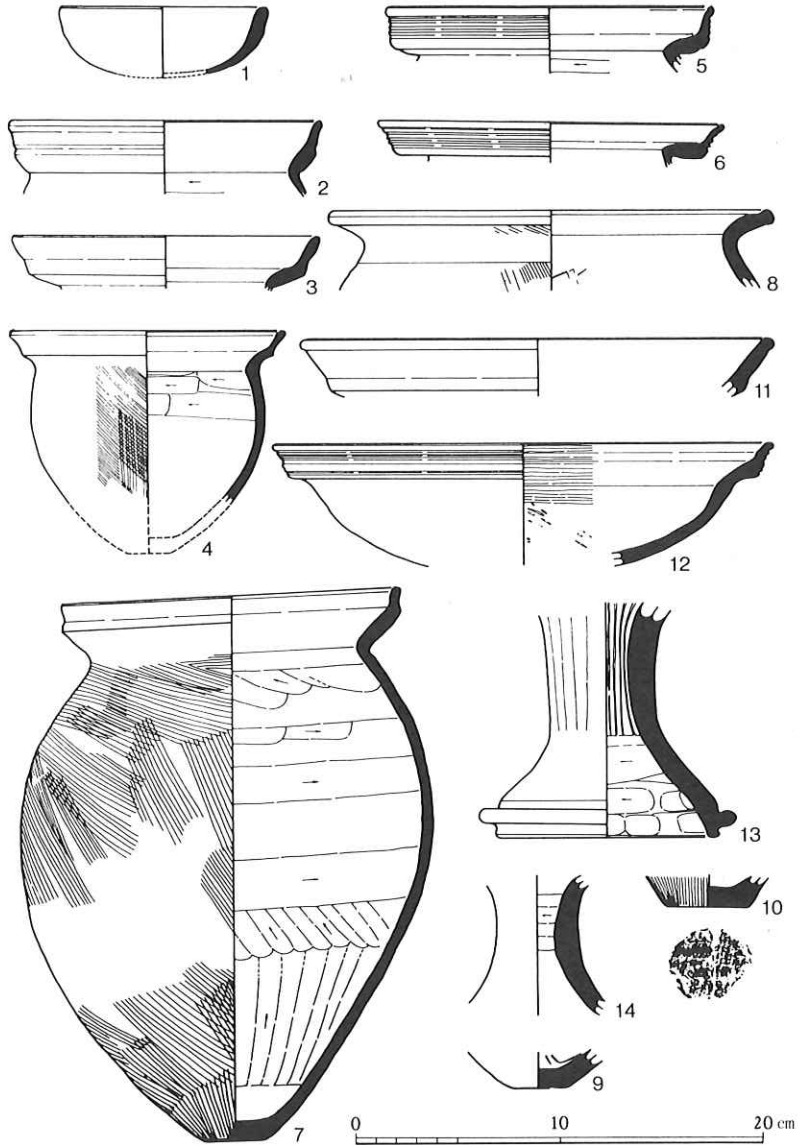
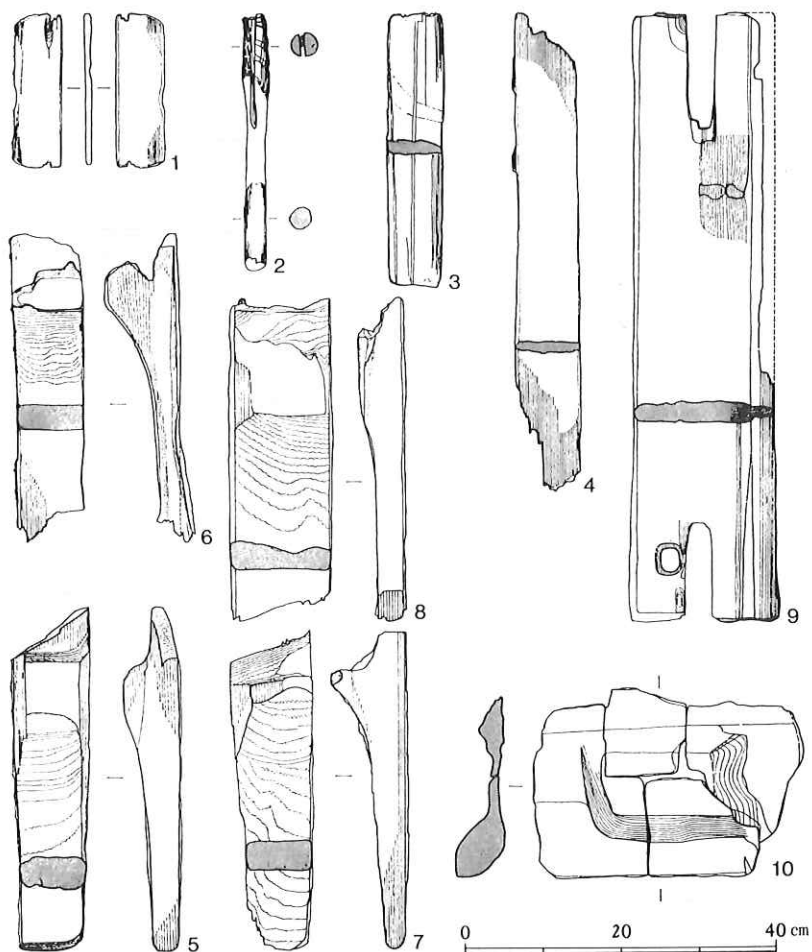


図22 第4トレンチ出土土器

4 宮内遺跡



1. 曲物の底 2. 木柄 3,4. 建築材 5~8. 梯子 9. 蹴放材 10. 盤状木器

図23 第2・6トレンチ出土木器（9は第6トレンチ出土）

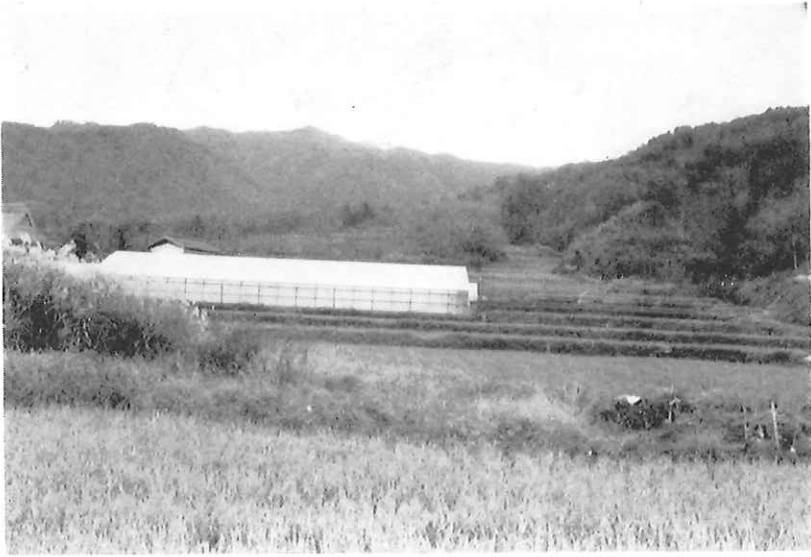


写真3 (上) 宮内遺跡遠望写真  
(下) 調査後の遠景写真

4 宮内遺跡



写真4 (上) 第2トレンチ梯子と甕  
(下) 第5トレンチ柱穴群 (西から)

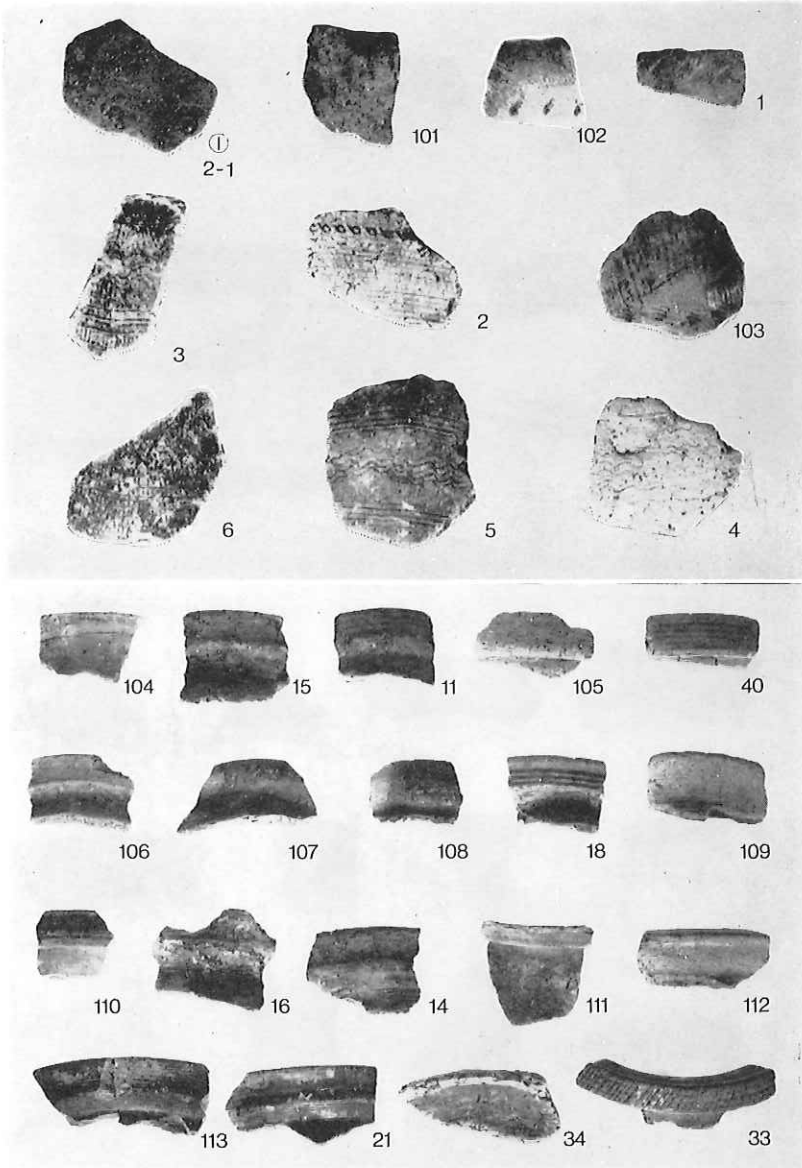


写真5 (上) 第1・2トレンチ出土土器 (㊦は第3トレンチ出土)  
 (下) 第1トレンチ出土土器

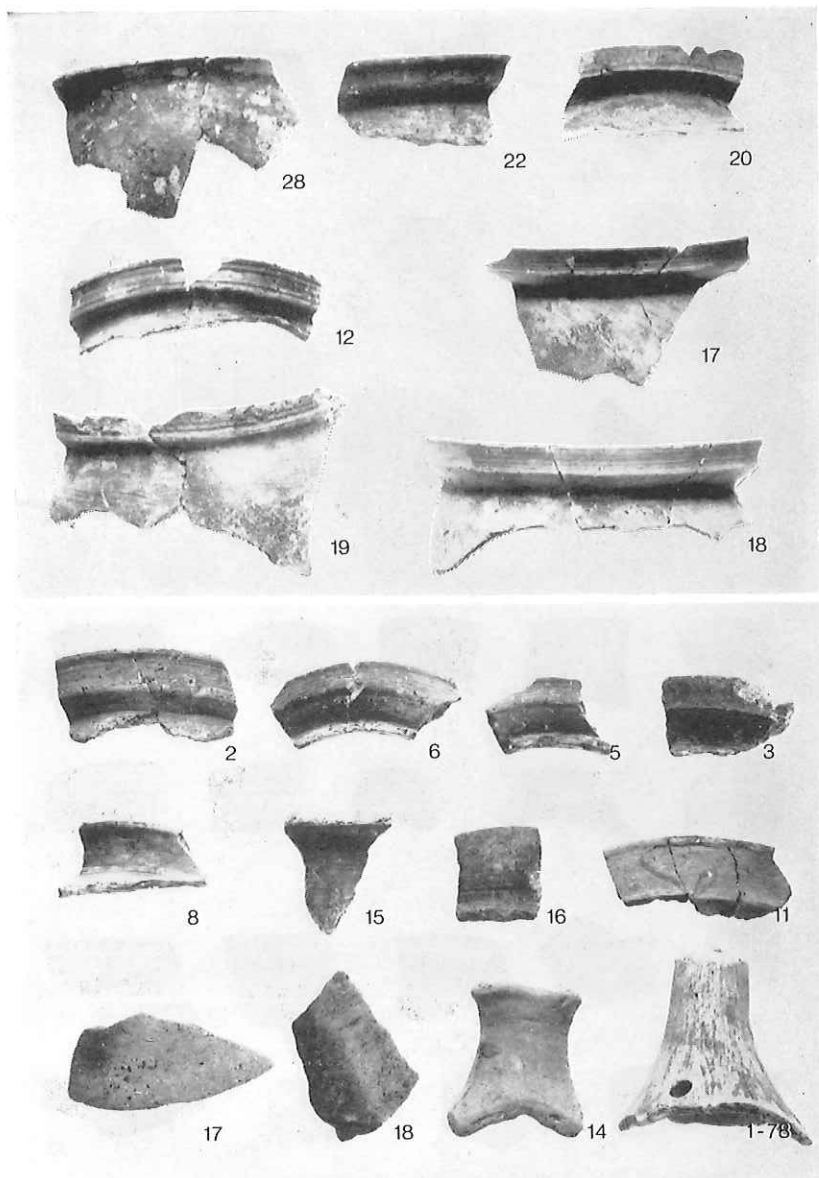


写真6 (上) 第1トレンチ出土土器  
(下) 第1・4トレンチ出土土器 (1-78は第1トレンチ出土)

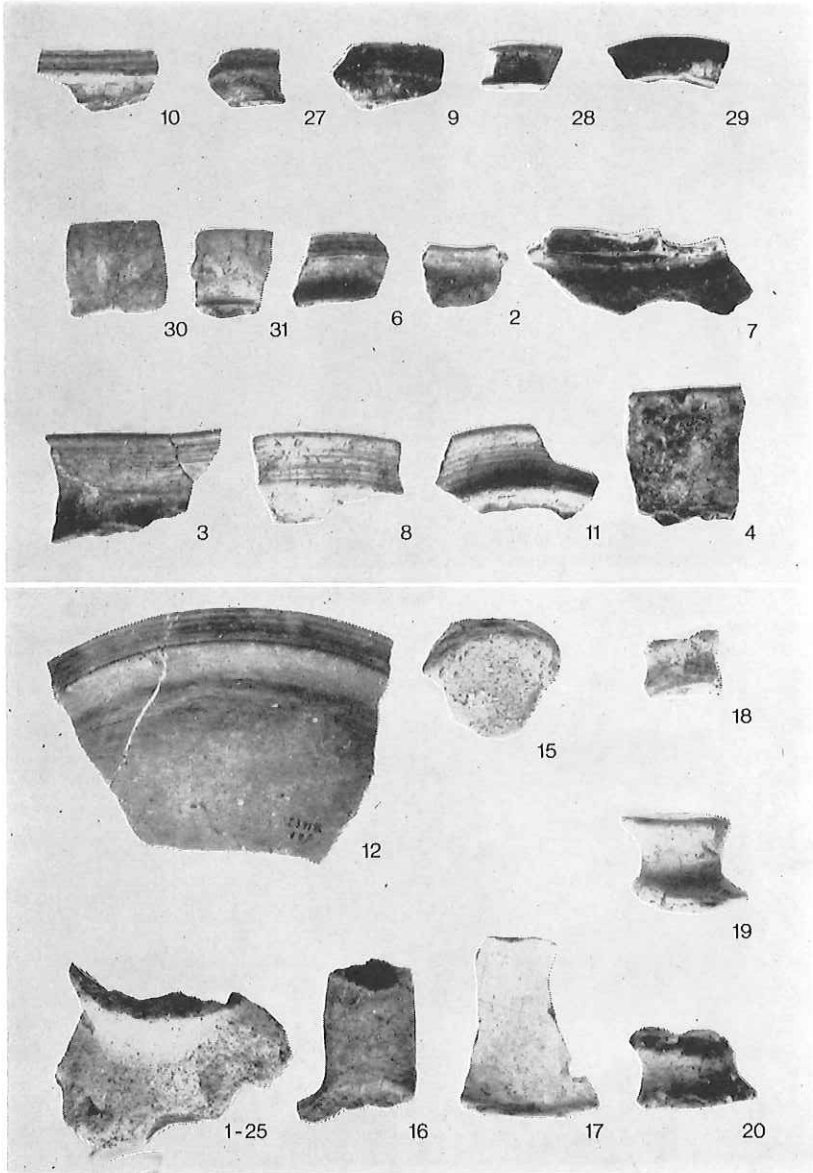


写真7 (上) 第2トレンチ出土土器  
(下) 第4トレンチ出土土器

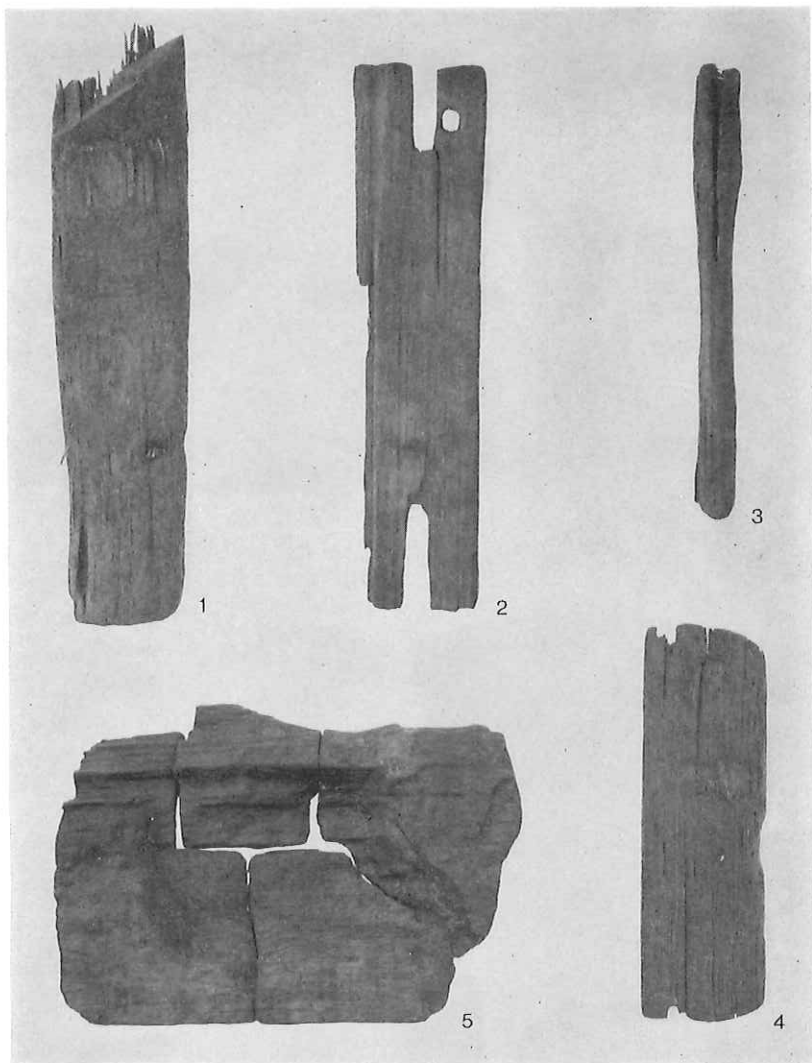


写真8 出土木器

1. 第2トレンチ出土梯子  
2. 第6トレンチ出土蹴放材  
3. 第2トレンチ出土木柄  
4. 第2トレンチ出土曲物の底  
5. 第2トレンチ出土盤状木器



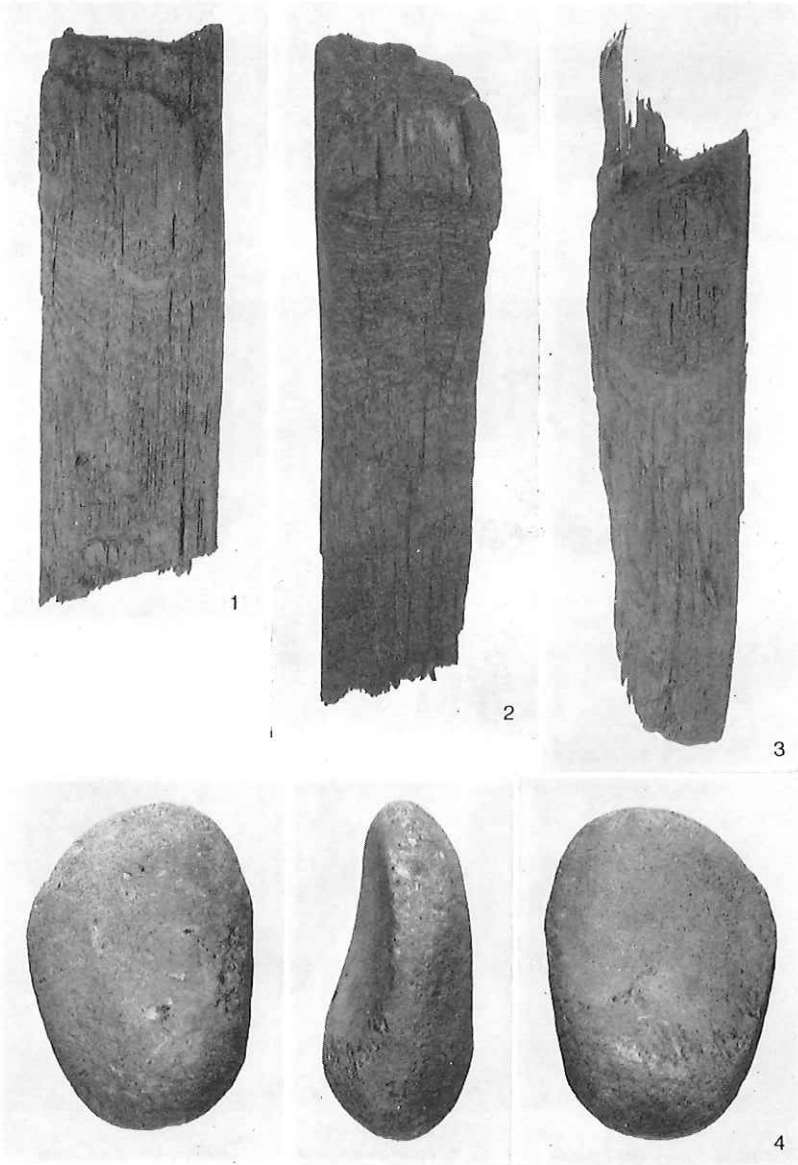
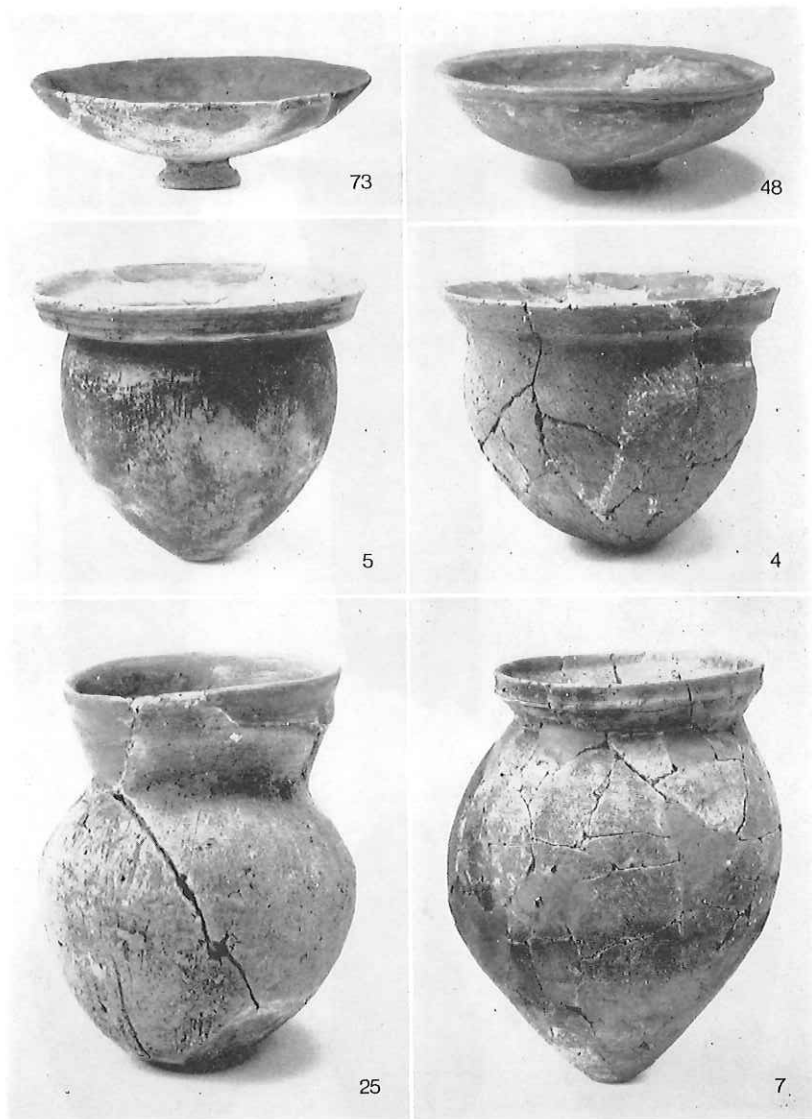


写真9 出土木器と砥石

1~3. 第2トレンチ出土梯子

4. 第6トレンチ出土砥石



73. 第2トレンチ出土低脚杯  
4. 第4トレンチ出土小形甕

写真10 出土土器

48. 第1トレンチ出土高杯  
25. 第1トレンチ出土小形壺

5. 第2トレンチ出土小形甕  
7. 第4トレンチ出土壺

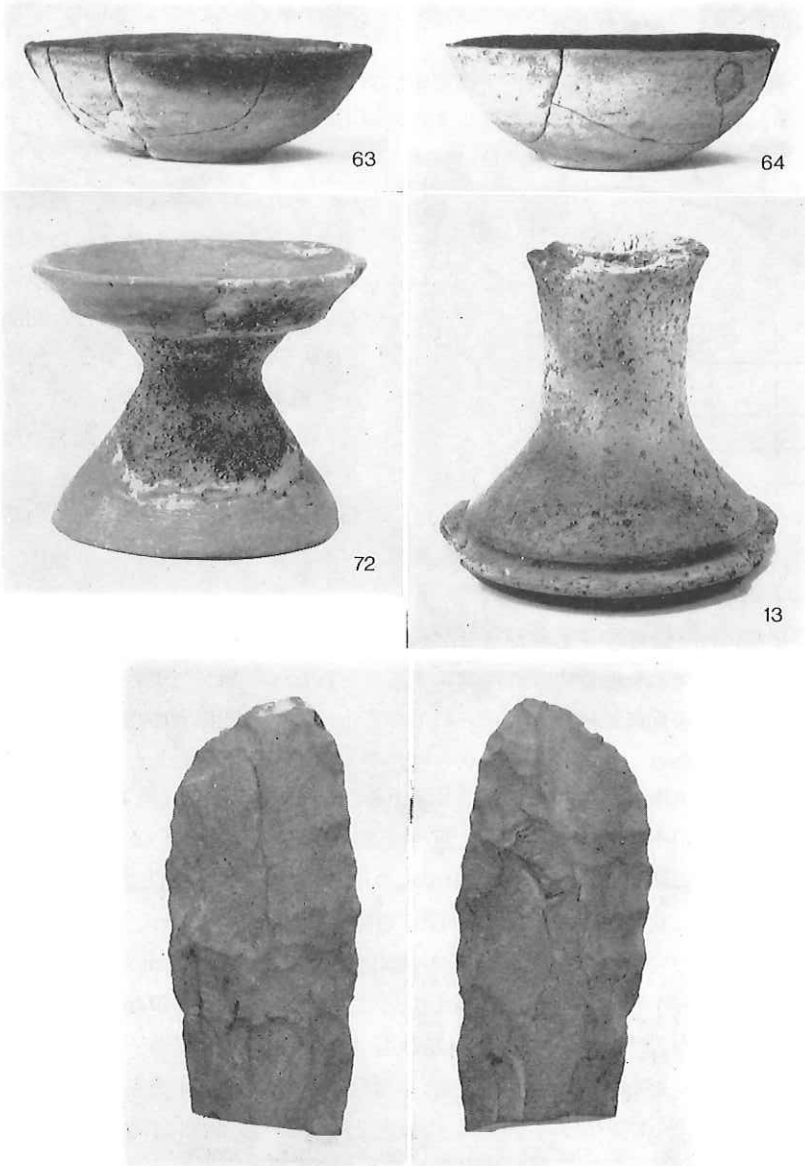


写真11 出土土器と石槍

63・64. 第30トレンチ出土黒色土器碗 72. 第1トレンチ出土土器台 13. 第4トレンチ出土高杯脚部  
下段. 第30トレンチ出土石槍

## 5 御屋敷遺跡

御屋敷遺跡は、出石町宮内字御屋敷にあって、出石川の右岸にそびえる此隅山（標高 140m）から南西に派生する尾根上に位置している。その屋根が土

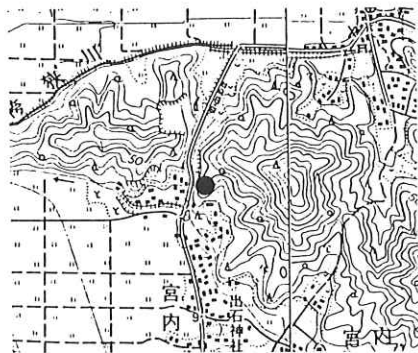


図24 位置図

取りによって削平されるところから、それに伴う事前調査の結果、遺跡の存在が明らかになったのである（図24）。調査の前からその尾根は、山名氏の抛城であった此隅山の一隅にあたることから、何等かの城郭遺構は遺存するものと考えられていたのである。調査の結果では、城郭遺構もさることながら、中世の火葬墓、古墳時代の竪

穴式石室、横穴、弥生時代後期の土壙墓、V字溝などが検出されている。

土壙墓（写真12・13）

尾根には3か所削平されたテラスがあり、弥生時代後期の土壙墓は上部テラスに、1号墓を囲むように南側に4基みられた（写真12）。1号墓は、上部テラスの中央部に位置し、墳丘としての盛土はなく、花崗岩の地山を掘りこんだものである。外形的には、北からのびてきた尾根を切断し、東西の両斜面を削平して墳丘を意識した築造が考えられる。墓壙は、直径10mのほぼ円形状の平坦面の中央に軸を北西～南東にして設けられている。墓壙の平面は、長方形の南東端に70×210cmの小さい長方形が突出したかたちである。墓壙は肩部から約170cmの深さの壙（上部で830×370cm、下部で550×170cm）を掘り、さらに、木口部分の地山を残して深さ約30cmの壙をH字状（400×12cm）に掘り下げ、その中央部に深さ5cm、180×50cmの木棺据えつけの壙を設けている。木棺の位置は、掘り方の中央部にあって、北西部が南東部よりも15cmも地山面が高い。副葬品は、木棺の中央左側から長さ41cmの鉄剣が1振りのみである。墓壙内で注目すべき施設は、遺骸の足部側にあたる南東端に設けられた長方形のテラスであろう。このテラスは、墓壙の肩部から約60cm掘り下げたところに設けられているが、遺物は何ら認め

られなかったのである。また、墓壙内北西隅には、肩部から98cm下がったところに三角状の小さいテラスが設けられており、墓壙内への足場と考えられる。なお、前述の足部側テラスは、中国遼寧省馮素弗墓1号にみる供献用のテラスに共通したものとも考えられる。1号墓の時期は、周囲の土壙墓に伴う土器から弥生時代終末のころと言える。2号墓は、1号墓の南西端に位置し、主体部の主軸を南東～北西方向の土壙墓である。2号墓の規模は、385×260cmであり、墓壙内の北西隅から弥生時代後期の土器が出土しているほか、副葬品はみられなかった。3号墓は、上部テラスの南西端の斜面を掘りこんで築いている。主体部の主軸は、南東～北西方向にとっているが、長辺の南西壁は欠失した状況で検出されている。規模は290×180cmである。土壙内からは、刀子、鉄鏃がそれぞれ1点発見されている。4号墓は、1号墓の南西端にあって、古墳時代の竪穴式石室の掘り方によって土壙の一部を削平されている。主体部の主軸を東西方向にした土壙で、その規模は320×140cmである。両木口部の壁面に接して後期の土器が出土している。5号墓は、1号墓の南東端の斜面に築かれている。主体部の主軸を南北方向にした土壙で、規模は136×70cmである。土壙内からは何等遺物は出土しなかったが、

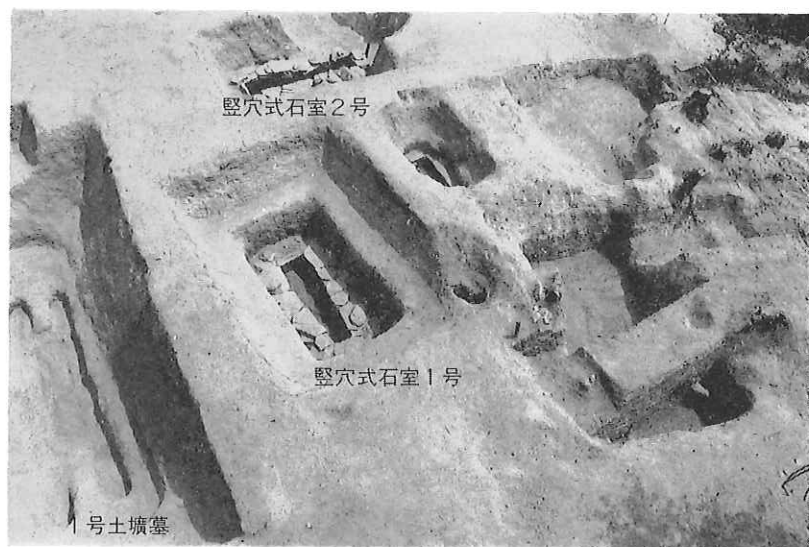


写真12 検出された遺構



写真13 1号土壙墓

土壙東側の肩部で長辺上に沿って後期の土器がみられた。以上のように、弥生時代後期の土壙墓は、1号墓を中心にして2～5号墓まで半円状にとり囲むような形で集団墓を形成している。

#### 竖穴式石室1号(写真14・15)

1号土壙墓に隣接し、その主体部の主軸に平行して南側に築造されており、明らかに1号土壙墓を意識した造墓であることがわかる。主体部は、土壙(420×310cm)を掘り、そのなかに竖穴式石室(長さ172cm、頭部幅49cm、足部幅31cm)を構築している。石室は玄武

岩の板状石を用い、木口部分には一枚石を据え、側壁を割石で積み、天井は4枚の板状石をかけてその上三重に積んでいる。

石室内には遺骸が遺存し、頭骨全体に朱が付着しており、前額部と左側頭には陥没孔がみられた。副葬品は、頭部右側より刀子1点、櫛2点、破碎された変形四獣鏡(直径9.3cm)、右手首付近からガラス玉55点、左手首付近から管玉3点が出土している。また、主体部上面からは鼓形器台、高杯などが带状になって出土しており、埋葬後において棺上祭祀が行われたものと考えられる。

#### 竖穴式石室2号(写真16)

1号土壙墓の南端で、4号土壙墓を切って築造されている。主体部の主軸を北東～南西方向にして、土壙(350×270cm)を掘り、そのなかに竖穴式石室(長さ206cm、頭部幅49cm、足部幅31cm)を構築している。石室は前述の1号と類似しており、玄武岩を用い、木口部分に板状石を据え、側壁は割石で積み天井は5枚の板状石をかけ、そのうえ四重に板状石を積んでいる。なお、石室内には遺骸は認められなかった。

副葬品は、頭部右側より四獣鏡(直径9.8cm)1点、櫛1点、それに頭部から胸部にかけてガラス玉85点が出土している。

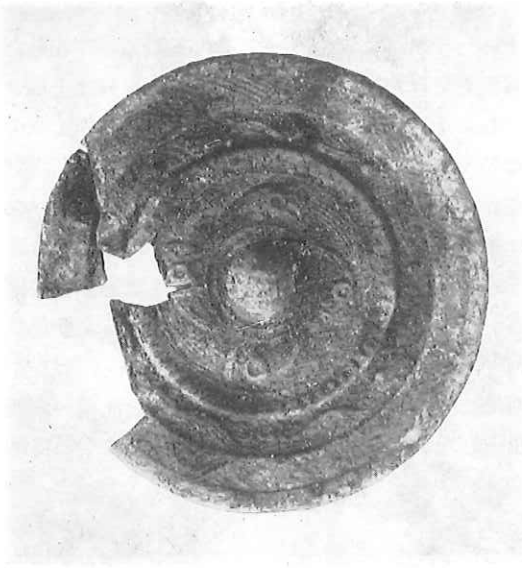


写真14 竖穴式石室 1号出土  
变形四獣鏡

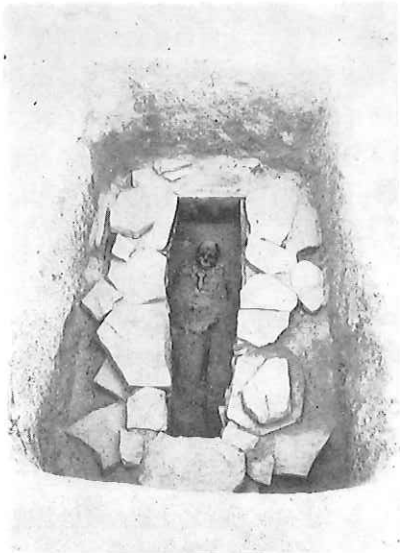


写真15 竖穴式石室 1号

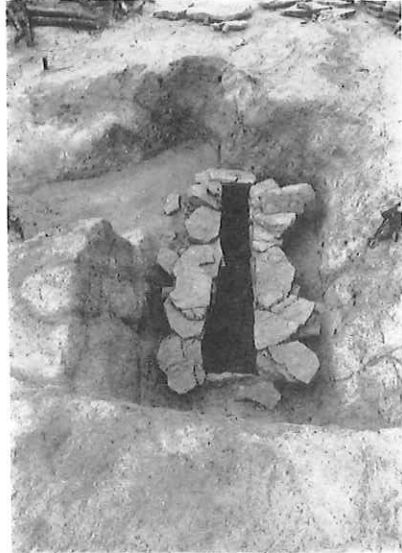


写真16 竖穴式石室 2号

### 古墳時代の土壙墓

上部のテラスから約8m下ったテラスには、6～7基の土壙墓が存在したものと考えられる。そのうち調査できた土壙墓は2基で、それ以外は土取りのために消滅し、その痕跡として土取りによってできた崖面に4基の土壙の断面を確認することができたのである。

1号土壙墓は、主体部の主軸をほぼ東西にしている。土壙は、地山を446×221cmに掘り、そのなかに組合せ式木棺を据えていたものと考えられる。遺物は、棺外において、頭部右から鉄製短剣1点が出土し、足部右から鉄鍔がブロック状で出土している。いっぽう棺内では、遺体に平行するような状態で大刀が出土するほかは何等遺物はみられなかった。

2号土壙墓は、テラスの西端に位置しており、主体部の主軸を北東～南西にとっている。遺物は何等出土しなかったが、土壙中央部において朱の痕跡を確認することができた。

### 土器棺墓

上部テラスの西南に位置している。この土器棺は、弥生時代の2号土壙墓が埋葬された後、2号土壙墓の北西の隅にあたる部分の覆土を掘りこんで埋葬したものである。土器棺は、表土を除去した段階で土器の存在を確認したが、完掘すると壺の胴部以下が残存する状況であった。壺の胴部上半部は、後述する中世の蔵骨器と同じく細片となって広範囲に散布していた。なお、壺は庄内式土器併行の時期と考えられ、2号土壙墓の土器とは時間的に前後の関係を持ち、今後、当地方の弥生時代から古墳時代への指標的なものとなるであろう。

### 中世墓 (写真17)

上部テラスの南西部分において、表土下の黄褐色土層下部で、こぶし大から人頭大の礫、陶器、瓦質土器、須恵器などの破片が3×2mの範囲内におわたって散乱していた。それらを除去すると、地山を掘りこみ礫を用いた石室(40×40cm)の三辺を検出した。石室は、礫の平らな面を利用して簡単に組み合わせたものであり、石室のなかには遺物はみられなかった。全体的にみて、後世の築城によって攪乱をうけていることは、前途の土器の破碎状況、礫の斜面や下部のテラスでのあり方から指摘することができる。

### 城郭遺構



調査に着手する段階で、何らかの城郭遺構が存在するものと考えられていた。しかし、調査の結果では、上部テラスと頂上（此隅山）の本丸への尾根を幅 120cm、深さ 20cm 程度の掘り切りが存在するのみであった。3つのテラス上には、柱穴や礎石類は検出することはできなかった。この尾根上に3つの平らなテラスを築いていることは、城郭としてのひとつの遺構であり、そこに簡単な建物ならば単なる整地だけで充分であって、今後、文献などの資料から考察しなければならないであろう。（前田 豊邦）



写真17 中世墓群の土器

## 6 上坂遺跡

所在地 出石町宮内字上坂、宮内から袴狭へと通ずる谷間部に立地する(図25)。

1978年(昭和53)4月、宮内から袴狭へと通ずる道の拡張工事において道

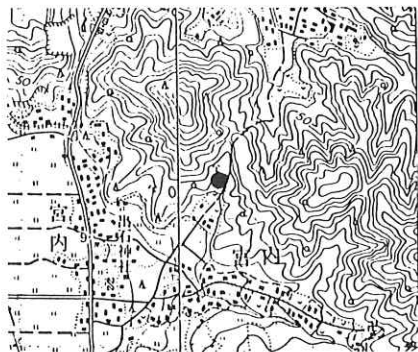


図25 位置図

の両側に側溝を取り付ける工事を行っていたところ、地表下1mの黒色土層中より、図26に示した甕の一部が露出していたものを当時小学生であった大治敬一氏が下校の途中発見したものである。大治氏によって発見された遺物には壺、甕、高杯、石斧などがあり、図面化できるものは甕のみである。

付近の遺跡としては、宮内黒田遺跡、出石神社遺跡、宮内遺跡など弥生時代の遺跡が多く点在している。

### 甕(図26)

甕は頸部からくの字状に立ち上がる口縁部で、口径は胴部よりも小さい、肩部にヘラによる刺突文が器面をめぐる。底部に穿孔を行っている。

器面の調整は最大腹径の所から下部にかけて非常にきめの細かいヘラケズリを行い、頸部は縦ハケメ、口縁部にはヨコナデを施している。内面は、口縁部はヨコナデ、胴部下半は縦ハケメを施す。

胎土は非常に精選された粘土を使用。焼成はよく、色調は器面において褐色を呈し、胴部中位から下は煤が<sup>すす</sup>付着している。

口径は19.4cm、器高29.8cm、底径6.7cm、底部は穿孔をしている。

この土器の製作年代は弥生時代後期前半に位置づけられる。

出土遺物は、出石町宮内、大治敬一氏が保管されている。

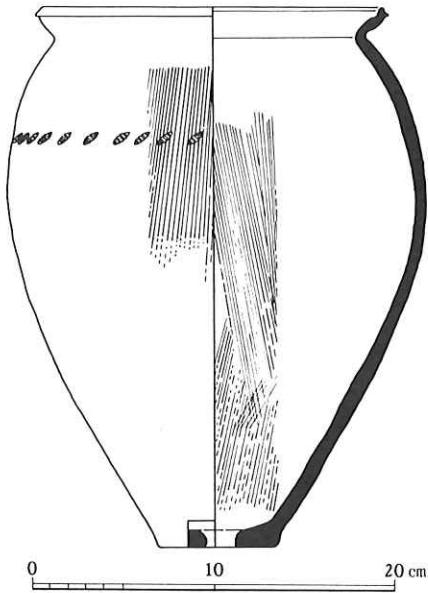


図26 甕

## 7 西の谷遺跡

所在地 出石町大谷字西の谷に位置し、大谷山から派生する枝状の尾根が北へと舌状に延びる先端から出土した。地目は、現在畑になっている(図27)。

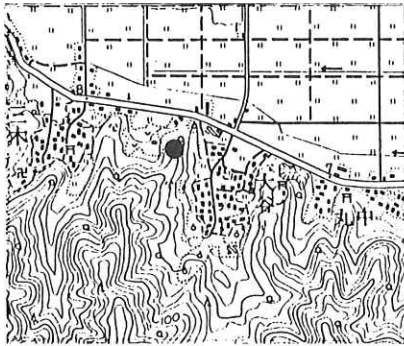


図27 位置図

1979年(昭和54)5月19日、大谷在住の瀬田隆夫氏が、ブドウ園の柵の支柱を取り替えるため、地面を1m近く掘ったところで、鍬先が偶然器台にあたったものである。そこで出石町教育委員会と連絡をとり、正置の状態にある器台を発掘したが、共伴遺物はなく、遺構の範囲、性格については不明である。

付近の遺跡としては、弥生時代に属する出石神社遺跡、小野小学校裏山遺跡、上坂遺跡、桜尾遺跡。古墳時代前期の田多地小谷遺跡、鳥居遺跡などがある。

## 遺物

## 器台(図28)

器台は上下が開き、中央部の狭い鼓胴形を呈する中空の土器で、完形品ではない。口径が底径よりも大きく、口縁端部は上下に拡張して、端面には鋸齒文を描く、その鋸齒文の中に左上から右下へ斜行する斜格子を描いている。さらにその上に3個単位の竹管文付円形浮文を8対貼り付けているが、製作時は7~8か所貼り付けていたものと思われる。浮文と浮文との間隔は一定ではない。口唇部には綾杉文が巡る。

脚柱部には、三段の四方透かし穴をあけている。脚台部は、ラッパ状に開き、端部には1条の凹線を巡らすのみで、ほかには何も装飾を施していない。

成形には、粘土紐を巻き上げているが、口縁部、脚柱部、脚台部分の3つに分割して成形したのち接合している。外面はきめの細かいヘラミガキ調整を施し、脚柱部内面は、横方向の粗いヘラケズリを行っている。脚台部分は、クモの巣状のハケ目調整後ヨコナデを施している。胎土は、径1cm前後の

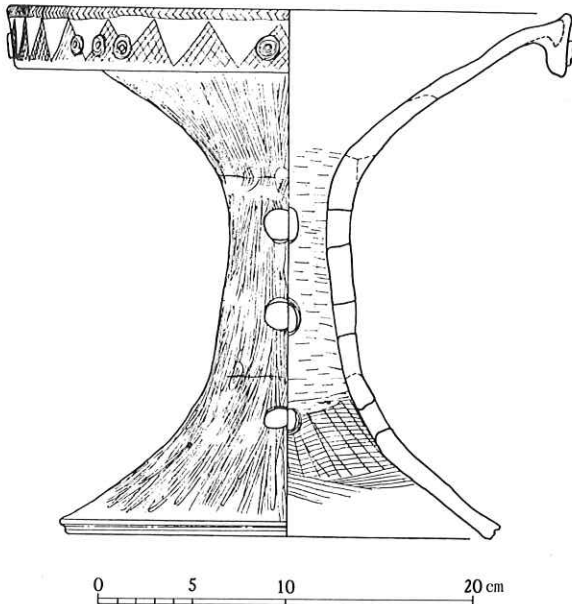


図28 器台（『兵庫考古』第7号より）

石粒が多く、長石、黒雲母も含まれている。焼成は、非常によく堅牢である。色調は、外面赤褐色、内面は黄褐色を呈している。

器高は28.0cm、口径30.0cm、底径23.4cmをはかる。

但馬地方における器台の出土例は、豊岡市妙楽寺遺跡（第4地点3号溝内出土）と日高町祢布ヶ森東遺跡（第

12トレンチ溝内出土）にある。両者共に西の谷遺跡例と同じく口径が底径をしのぎ、上半部のほうが大きいものである。妙楽寺遺跡例は、口縁部を上下に拡張し、3～5条の退化した凹線を施す、脚柱部には三方の透かし穴をあけている。祢布ヶ森東遺跡例は、口縁部が下方に垂下して5条の擬凹線を施したのち、楕による波条文を描くものと、口縁部に擬凹線のみを施す例があり、共に三方の透かし穴をあけている。この三者は器形は似ているが口縁部には綾杉文、鋸歯文、円形浮文等はなく、製作時期は、弥生時代後期末から古墳時代前期に位置づけられている。

次に口縁部に綾杉文、鋸歯文を描き口縁部に竹管文付円形浮文を貼り付ける特徴は、弥生時代の畿内第Ⅲ～Ⅴ様式の壺などに見ることができる。また一般的には器台が出現するのは第Ⅳ様式以後であり、内面のクモの巣状ハケ目調整技法などからこの土器の製作された時期は、妙楽寺遺跡や祢布ヶ森東遺跡出土例に先行する弥生時代後期前半に位置づけられるものであろう。

遺物は出石町教育委員会において保管されている。

注 1. 渡辺 昇 「出石郡出石町西の谷遺跡出土器台」『兵庫考古』第7号 1979年

注 2. 榎本誠一 小川良太 瀬戸谷皓 「但馬妙楽寺遺跡群」1975年

注 3. 榎本誠一 加古千恵子他 「日高町史」資料編 1980年

## 8 モロミ台遺跡

所在地 出石町弘原小字モロミ台、水田中に所在する(図29)。

遺物は1966年(昭和41)11月、モロミ台の灌がい用水路の補修工事が行わ



図29 位置図

れた際、用水溝内長さ約100m、幅約1.5mにわたり岡本久彦氏が揚げた土の中から木製品と共に採集されたものである。

付近の遺跡としては、西の谷遺跡、宮内黒田遺跡、出石神社遺跡、宮内遺跡、田多地小谷遺跡、鳥居遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての遺跡がある。

遺物

甕(図30)

実測図に掲げた土器は、但馬から丹後地方にかけて特徴的な頸部からくの字状に外反する二重口縁部の端面に擬凹線文を2~4条施す甕の破片である。

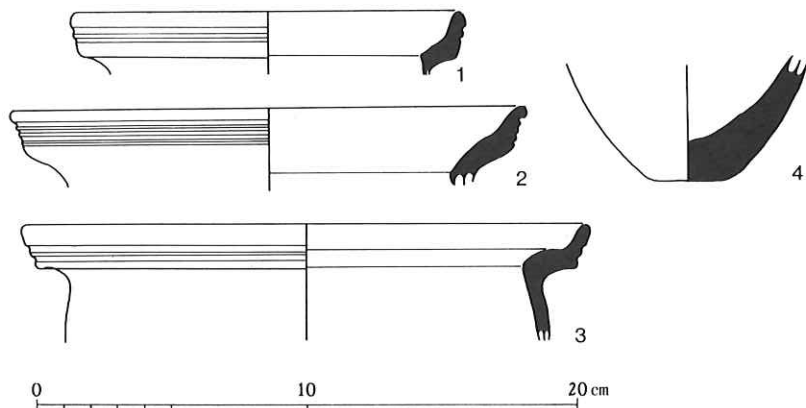


図30 甕

口縁部の径から器形の小さな1と大きな2、3とに分けることができる。

これらの土器は口縁部しか残っていない小さな破片であるけれども、器面の調整は、頸部はナデを施し、口縁部は擬凹線、口縁部内面はヨコナデ、頸部以下をヘラケズリである。

胎土は長石等の小石を含む、焼成は良好、色調は黄褐色、褐色を呈する。

復原口径 1—14.5cm、2—19.1cm、3—21.1cmをはかる。

製作年代は但馬地方の後期後半に求めることができ、宮内遺跡、田多地小谷遺跡に類例がある。

4は底部の破片である。「1966年(昭和41) 桜尾」と記入されているので甕と同じ日に採集された遺物の1つである。1～3の甕の底部と推測されるものである。

底径は3.0cm程の小さなもので、外面には縦ハケメを部分的に施している。内面はナデが観察される。

胎土には、小さな石粒が含まれている。焼成は良く、色調は黄褐色を呈する。

甕と同様、弥生時代の後期後半に属するものと推測される。

遺物は出石高校に保管されている。

## 9 入佐山墳墓群

所在地 入佐山1号墳のすぐ西側斜面に位置する(図31)

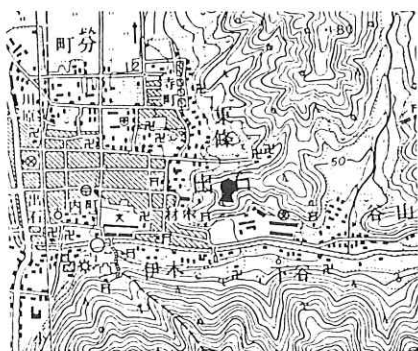


図31 位置図

1987年(昭和62)5月、出石町教育委員会が遺跡確認調査を実施。弥生時代から古墳時代に至る6基の墳墓が確認された(図32)。

### 第1主体

北側尾根の第1主体は墓壙を2段に掘りこんでおり、割竹形木棺を埋葬していたようである。南北の端は確認していないが全長3m以上と考えられる。棺底から出土

した壺は下半分がなく、枕として使用された可能性をもつ。また墓壙近くには3点の土器と砥石がまとめ置かれ、墓前での祭祀の跡と思われる。4～5世紀の墳墓である(写真18)。

### 第2～6主体

南側尾根の第2～6主体は弥生時代後期、尾根上にテラスを作り、その内に密集して墓を造成するタイプの墳墓群であり、尾根全体にはまだ多くの墓が存在していると考えられる。

第2主体は他の墓にくらべ掘りこみが浅く、木棺が直葬されていたと推測される。土器(甕)が副葬されていた。

第3主体は墓壙の一边が礫を含む土塁でつくられ、墓壙中央部分のみに多量の礫を置く珍しいタイプの墓である。土塁は斜面に直行して掘りこまれた墓壙の山裾側に約30cmの高さで巡る。礫群内には土器(壺、甕)が壊された状態で一括して副葬されていた。主体部は木棺を直葬していたと思われ、棺内には南よりに径2～6mmのガラス小玉435個が、中央に鉄鏃1、土器(甕)が置かれていた(口絵2)。

第4主体は墓壙の西端を確認したのみだが、尾根にそって山側に広がると思われる。すぐ西隣から甕(弥生)が横転した状態で検出されており、もう一つ削平されてしまった墓のあった可能性がある。

第5主体は小さく墓壙の一方は整地土を置いてから掘り込んでいる。棺は



木棺と思われ、その両側に壊された土器（甕、水差）を置いていた。また整地土からは甕型のミニチュア土器が出土している（写真19）。

第6主体は各墓塚の中で一番大きい木棺を直葬している。棺内のやや西よりから径5mm前後のガラス小玉65個、鉄鍬2、土器（甕）がまとまって出土した（写真20）。

以上が調査の概要である。入佐山が弥生時代より利用されていたことは入佐山古墳群の出現を考える上で非常に重要であり、その墓地としての利用が第2～6主体（弥生時代後期）にはじまり、第1主体（4～5世紀）、入佐山1号墳（5世紀後期）と続いていたことが分かる。またガラス小玉計500個もの出土や、各遺構が土器を伴うことによってその年代が分かるなど、今後但馬の弥生文化を考えるうえで貴重な遺跡といえる。  
（小寺 誠）

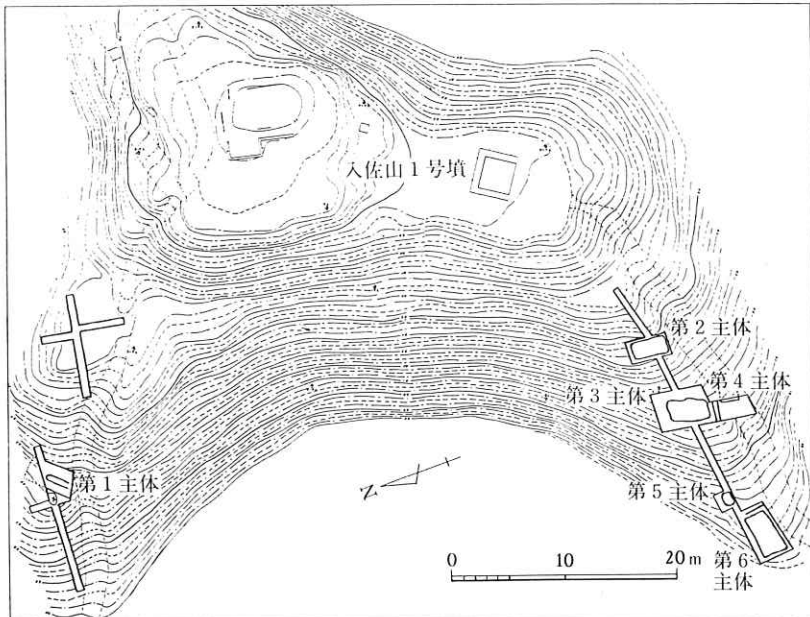


図32 入佐山墳墓群遺構検出状況（1：600）

9 入佐山墳墓群

表1 入佐山墳墓群主体部一覽表

	全 長	幅	深 さ	棺	副 葬 品	備 考
第1主体	3.0m 以上	2.0m	1.2~0.6m	割竹形 木棺	壺(土師器)	2段掘 西側より高杯、小 形壺2、砥石出土
第2主体	3.1m	1.6m	0.8~0.5m	木棺	甕(弥生)	
第3主体	3.6m	1.9m	1.3~1.0m	木棺	ガラス小玉435 鉄鏃1 甕2、壺(弥生)	主体部埋土より ミニチュア土器 裾側に土塁をもつ
第4主体	不明	1.6m	不明	不明		西側より甕 (弥生) 出土
第5主体	1.2m	0.8m	0.6m	木棺	甕、水差(弥生)	墓壙整地土より ミニチュア土器
第6主体	4.0m	2.0m	1.5~0.7m	木棺	ガラス小玉65 鉄鏃2 甕(弥生)	



写真18 第1主体



写真19 第5主体



写真20 第6主体

## Ⅲ 古墳時代

## 10 鳥居遺跡

所在地 出石町鳥居、1933年(昭和8)12月、出石川にかかる鳥居橋架橋工事に際して、現川床より約5m下から出土したものである(図33)。



図33 位置図

付近の遺跡としては、東に出石神社遺跡、宮内遺跡、宮内黒田遺跡、上坂遺跡、西に西の谷遺跡などの弥生時代の遺跡が点在する。また、古墳として東谷古墳、尾崎古墳群が丘陵上に立地している。

## 遺物

## 壺(図34)

壺は小さな底部から胴部の張る算盤玉の形を呈し、細い頸部から、ラップ状に開く口縁部をもつものである。口縁部内外面は、ヨコナデ、胴部外面は全体にヘラミガキが施され、内面の頸部と胴部にはハケ調整が行われている。残存高17.1cm、口径10.3cm、底径3.0cmをはかる。胎土はよく焼成は良好、胴部中下半に黒斑が見られる。色調は灰褐色を呈する。

土器の製作年代は、古墳時代前期と考えられる<sup>注</sup>。

遺物は、浜坂町在住の山本茂信氏が所蔵されている。

注. 石野博信『但馬の古式土師器』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第3集 1976年

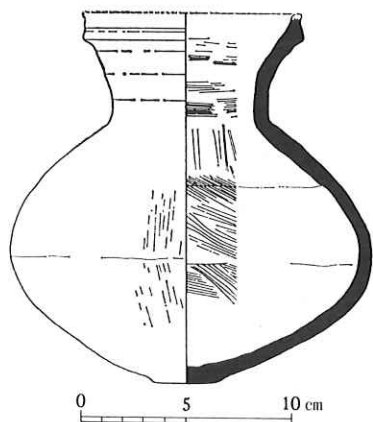


図34 壺